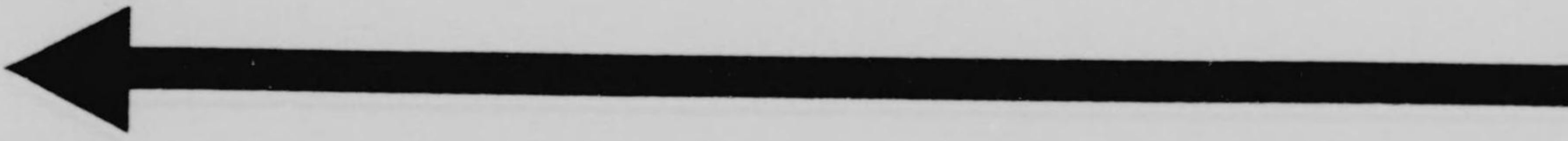




始





The Shearing Feast:

*Aut. Here's the midwife's name to't, one Mrs. Taleporter,
and five or six honest wives that were present.
Why should I covey lies abroad?*

377-116



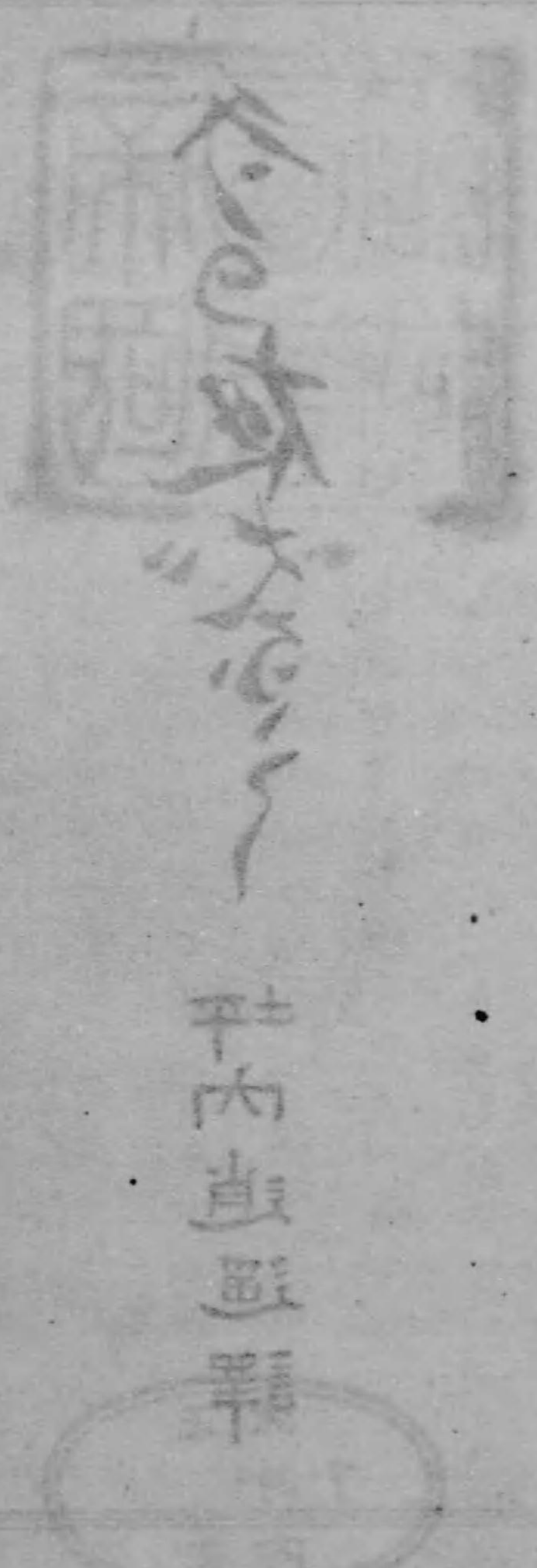
平内道遥

平内道遥

7. 11. 29

内交

311



續言

此作の題名は、其第二幕第一場中の「冬は眞面目まじめなお話、云々」といふ白まへに因みて、第一幕より第三幕までの悲惨なる筋立の、冬の陰鬱なる物語らしきを暗示し、同時に、此作の専ら傳奇的にして理窟りくつに拘はらざるべきをほのめかしたるなれば、明かに「冬の夜のお伽話」の義なり。現に、或古き記録中に、或は此作と同一なるべく假定せらるゝ脚本を「A Winter Night Tale」と記入せる例あり。勿論、其記

録の眞偽は頗る疑はしき由なれども、「冬の話」といふ題名の本義は、これによりても、前に謂ふ所に外ならざることほゞ明かなり。又、此劇の書かれし恰も前年——一六一〇年——に、彼の有名なる「治者の鏡」の追加として「A Winter Night's Vision」といふ一篇が発見せられき。或は沙翁は、此可憐なる書名を見て、ふとおのが作のを思ひ附きたるにはあらずやといふ説もあり。按ふに、彼れが「夜」の字を省きしは語調上の都合ならん、但し邦語としては「夜」の字有るかた語呂一層佳なるを覺ゆ。かたぐ、予は「夜」の一、字を加へて題名を譯したり。

此作の刊行せられしは一六二三年の二折本版を初めとすれども、其書かれしは、例の如く思想の傾向、韻律の特質及び興味本位の作意、圓熟せる舞臺技巧等より推測して、「テムベスト」及び「ヘンリー八世」よりは以前「シンペリン」と粗同時、即ち一六一一年頃ならんと假定せらる。すなはち「傳奇劇」と總稱せらるゝ沙翁が最晩期の作中に屬せしむべき一作なり。其時代は、オペラの原始的なる前身とも見るべき假面劇の盛んに宮中に歓迎せられし頃とて、民間の科白劇も、次第に其影響を蒙りて、多く歌舞的要素を混用し、耳

目、其の興を主とせんとするの傾向を馴致せり。而して沙翁の作中、此趨勢を代表するものは、主として其晩期の作なり。就中、「シンベリン」と此「冬の夜話」とは、其所傳、毒脈の頗る我歌舞伎のそれに近似せる點に特色あり。例へば、時代、地理、風俗、用語等に伴ふ甚しき錯誤混淆、性格及び脚色に伴ふ比較的少量なる不自然、非論理、或は時代劇脈と世話劇脈との雜糅、悲劇要素と喜劇要素との混淆、及び時、處、筋の甚しき不一致、歌舞的要素と見世物成分の豊かなる適用等は、自然に我老近松以下、半二、出雲、宗輔らの諸作乃至文化以後の半淨瑠璃、半草双紙式の歌

舞伎の諸作を聯想せしむ。要するに、此作は、世界の實際的大劇詩人の、其最老熟期に於ける作意と手法とを窺ふには頗る都合よき一の標本たり。

此作の種本となれるロバート・グリーンの小説は、一五八八年の出版にして、表題は *Pendosto*、別名「時の勝利」、廣くは *History of Dorachus and Faunia* (ドラスタス・フォーニヤ物語) として知られたり。按ふに、右の原作に幾らか似寄りたる筋の話は十六世紀のリスヌーエニヤ人(歐羅民族)の間に寫本にて傳はれるもの僅かに一種あるのみ、といひ、而してそれと恥れ

とは（ラーネスの抄録によりて察すれば）相似たる點頗る稀薄なれば、これは主としてグリーンンの創意に成れるものと見做すべきが如し。原作は中々の長篇なるが、こゝには本劇との關係を示すを旨として、其梗概を掲ぐることにす。原作は嫉妬邪推の忌むべきを辯じ、其弊の怖るべきを説くを冒頭として物語の本文に入り、時代のいつ頃たるかを語ることなくして、直ちに主人公の身の上に及べり。

モヘミヤ國にバンドストーといふ王ありしが、敵國と戦つては全勝を収め友邦とは厚く親睦し、萬民に畏られ且つ愛せられき。王は其美にし

て賢なる最愛の妃ベラリヤ *Bellaria* との間に一王子ガリナー *Garinia* をもうけて、琴瑟ますます和合せり。時しも王の幼時よりの莫逆の友シ、リヤ王 *イジスタス* *Istabus* 遙かに海を渡りて、舊誼を温めんとて、數十年ぶりにて來訪せり。王狂喜して之を迎へ、妃に吩咐して、特に款待に努めしむ。妃旨を奉じて優遇至り盡さざるなく、夜間にも、みづから賓王イジスタスの寢室に訪れて、設備の遺漏なきをたしかめ、晝は常に其傍に侍し、もしくは共に庭園内を逍遙しなどして、一意其心を慰むるに力め、かくして數ヶ月を重ね、互ひに深く相敬愛せり。勿論、妃の意は、一に夫王の爲にせるに他ならざりしが、二人の交情の日に濃かなるを見たるバンドストーは、次第に二人の間を疑ひ始め、日を重なるにつれて、邪推裏り、嫉妬の情燃ゆるが如く、遂に忍びかねて、賓王の捧盃役を勤めなれるフラニオン *Franton* に命じて、イジスタス王を毒殺せしめんとす。フラニオン驚き、諫争すれども、聽かず、辭まば、死刑に處せんと威迫せり。フラニオン餘儀なく命を奉ずべきを約して退き、如何にすべきかを自問自答

せし結果、其心の指揮に恃りかれて、事の有りのままをイジスタスに密告せり。イジスタス之を聴きて驚き、且つ「戀愛と功名との爲には、友をも道をも顧ざるの習ひなり。バンドストーの意、或は予を殺すと同時に、兵をシ、ヤヤに出だして、國をも奪はんとするにやあらんと恐れ、フラニオンの勤めに従ひ、急ぎ舟に船を離して、順風の來るを俟ち、やがて從臣一同と共に、一夜、暗に乗じて、ボヘミヤの海岸を脱し去れり。夜明けてバンドストーの之を知るや、斯くフラニオンの裏切したるは、畢竟始めより妃とイジスタスと彼れと三者結托しかりしが爲ならんと邪推し、疑ひの濃中したるを信じて、甚しく憤激せり。然れども強國王にして蒙れて有力なる同盟國をも有てるイジスタスに對して、今急に復讐すべき便宜なき爲に、専ら怒を妃に移して、かくとも知らず幼王子ガリナーと嬉戯しかりし妃を捕へしめて獄に下しぬ。不幸にも豫て懐胎中なりし妃は、獄に在りて、其臨月の迫れるを知り、其冤枉を歎き悲むこと更に切なり。牢役人某之を洩れ聞きて妃に同

情するの餘り、或は産期の迫れることを王に告げなげ、多少其心相がんかと思ひて、委曲を王に傳奏せしに、王は時日を推算して、それは必ずイジスタスの胤ならんと疑ひ、ますく「眞逆の美を燃し、ついで妃が一王女を産せしを聞くや、母子共に直ちに焚刑に處せよと命じぬ。然れども諸公卿の斯くと聞きて驚き、さまざまに王を諫め止むるに及びて、漸く母子を焚殺することを中止し、嬰兒だけを船具もなき小艇に打棄せて、荒海の上を浪のまに／＼押流すべしと嚴命しぬ。此宣告を傳聞するるとひとしく、妃は獄中にて悶絶せしが、冷酷なる王は、それにも拘らず、幼兒を豫定の如く海上に放棄せしめ、尙其復讐の念を満さんため、妃を法庭に引出だし、尋常の罪因を扱ふ如くに訊問せり。此際妃は少しもわるびれたる體なく、つぶさに其冤を辯疏し、「王の彈劾は悉く激昂の語たるのみ、道義の語にあらず。かくの如き手續にて刑を行ふは庸慮なり、政道にあらず、云々」と陳じ、「かくても尙信ぜられずば、王の最も信任する使臣六人をデルフォスの島に送りて、アポローの神託を聽

かしめ、それによりて罪の有無を決せられたし」と乞へり。此道理ある請求を王も流石に否みかれたり。すなはち六人の使臣は、命を受けて、直ちにテルフオスなるアポローの神宮に赴き、神官に依りて、式の如き供へ物をなし、親しく怖ろしき神の聲をも聴き、且つ嚴封せられたる託宣の寫しを携へつゝ、往返六週日にして本國ボヘミヤへ歸り着けり。(此託宣の文言は、本劇中に沙翁が用ひをれるものと全く相同じ)。さるほどに、公卿らは、此託宣の内容は、王妃の生死榮辱に関する極めて重要なものなればとて、其開封には、貴族も、平民も、妃自身も共に立會ふを許されたしと王に乞へり。こゝ於て、更に改めて妃をば審判庭に立たしむることとなりて、王は先づ一吏員に命じて彈劾狀を朗讀せしめぬ。是れ妃のイジスマスと通じたるの罪と其フラニオンと共謀したるの罪とを告發せるものなり。妃は之に對して聊かも慍々色なく従容として一々其冤罪たる所以を辯じ、此上は只ひとへに神託によりて決せられたしと言へり。王すなはち一公爵に託宣を開封して朗讀

すべきを命ず。朗讀了るや、平民ら先づ大いに歡呼喝采して、妃の冤罪の斯くして悉く雪除せられたるを喜び賀せり。こゝに至りて、王もはじめて其非を悟り、深く恥ぢて一切の過誤を懺悔し、妃に謝罪しくれよと貴族らに乞ひ、尙速かにボヘミヤ王とも又フラニオンとも和解すべしといふ。然るに其語未だ了らざるうちに、幼王子ガリナー暴死せりといふ凶報突如として至りぬ。之を聞ける病餘の王妃は、餘りに急激なる大悲喜の轉換に堪へかれてや、卒然として昏倒し、そのまゝ歸らぬ客となりぬ。王將た此駭きと悔いと悲みとのために忽ち其場に闖絶せしが、奥殿に伴ひ入れらるゝに及びて、辛うじて蘇生せしも、それより三日の間は物も言はず、限りなき哀愁に沈めり。彼れは、悔恨の餘り、一日、劍を把つて自刃せんとせしを、貴族ら早くも遮り止め、さまざまに諫め勵ましければ、王も漸く思ひとゞまり、妃と王子とを共に鎗に包みて厚葬し、其墓石には、妃が王の故なき嫉妬の爲に冤死せる由を金文字を以て明記せしめ、日に自ら其墓に詣て、懺悔の祈により

て罪業の消除を願へり。

グリーンンの原話にても、以上にて一段落をなし、以下はおのづから第二部の形を成せるが、沙翁の劇は此第二部の中より牧者の棄兒を拾ふ件だけを、一番目とも見做すべき上半の方へ編み入れて、以て後段の伏線となし、恰も我劇の或種類が、前を時代物風に、後を世話物風に脚色せると殆ど同じ結構法を用ひて、原話の第二部を我劇の二番目式に、(一番目の悲劇的なるに反して)極めて陽氣に殆ど今の喜歌劇風に脚色せり。すなはち第一部に對しては、沙翁の創意は、本劇の頗る重要なる女性役ポーライナ

夫婦を寄與したる外には、特に取出で、言ふ程のこともなければ、第二部に入りては、殆ど悉くが其新意匠に成れりとも評すべく、原話に負ふ所は僅かに其骨髄のみなり。

さて舟も船具もなしに押流されし小艇は、嬰兒を載せたるまゝにて不思議にも恙なく、シ、リヤの海岸に漂ひ着きたり。折から風雨の後なりしが、その片田舎の貧しき一牧者、其雇ひ主の羊の行方を捜すとして、渡邊に來り、ふと嬰兒の哭く聲を聞き、訝りて岸なる艇に立寄り、遂に嬰兒とそれに添へたる金貨、金鎖、刺繡せる上被等を拾ひ取りて家に歸る。其妻、夫の嬰兒を抱きて歸れるを見て嫉妬し、隠し女の生めるにあらずやと疑ひ怒るとなどあり。然れども事情を告げられて心解け、夫が種々の償費品々を獲たるを喜び、夫と歸りて兒は妻女として育つべく、而して此事情は飽迄も他人には秘すべしと相談せり。

此牧者の名はボラス *Purra*、妻の名はモブサ *Mopca* なりき。

かくて養女の名をフォーニヤ *Fuonia* と附けて、いつくしみ育つるうちに、牧者夫婦は家計漸く裕かになりて、今は一かどの物持ともなれり。フォーニヤは生ひ立つにつれて、才色共に傑れ、争ひがたき氏の現す氣高き者く、十六歳となれる頃には、其みやびやかなるあてやかさ、人間とは見えす、女神などにやとも見えければ、其名は朝廷にまでも知られき。されどもフォーニヤは温順なる性質とて、少しも傲りたか上騰る色なく、日毎に羊を驅りて牧に出て、怠らず農事に努め、暑き日は木の枝、草花にて冠り物を製りて戴き、かくして激しき日射を避く。其自然の美しさは、さながらの花姫神とも見えにき。

シ、リヤ王イジスタスの王子ドラスタス *Drautas* といふは、今や二十歳に達して、風姿端麗に、才徳も秀で、加ふるに武技にも長じたるが、父王は王子をして早く妃を迎へしめて安心せまほしと思ひて、先づ豊めアンマーグ王の許に特使を送りて、其王女との許嫁を約し、さて豫め會諾を期して王子

に此事を打明けしに、王子は父王の專斷を快しとせざるもの、如く、意外なる返答をなし、いかば、父王は遂に大いに不興し、其日は席を離つて相別れぬ。然るに此事ありて後幾ばくもなく、王子は従者若干と共に、其好める鷹狩に立出でしが、其歸途圖らずもフォーニヤが、其友の一村女と共に、牧場の仕事を終へて家路へと急ぐに逢へり。王子は一瞥して、こは是れダイナ輝娥ハにあらざるやと疑へり。かくて、此美女の才藻の、果してよく其外形に副へるや否やをば檢せんとして、王子はフォーニヤを呼び近づけて、姓名、住所等を試問するに及び、其内質の美の外容のそれに恥ぢざるを知りて、之を思慕するの情遽かに切なり。同時にフォーニヤもまた翫かに王子をば慕ひそめたり。されども後者は、さすがに女心に其望のおふけなきを省みて、自ら諱らむるに力めたりしが、王子は宮中に歸りて後も、夢寐念々フォーニヤを思うて止まず、遂に堪へかれ、一日近侍をも連れず、只獨り宮中を忍びいで、彼の村の牧場へとあこがれ行きぬ。やがて、折よくも或岡邊に只ひとり休らひをれるフォ

ニヤに逢ひて、再び親しく言葉をかはし、ますます其才藝の秀でたるに感じ、漸く其真情を吐露する程に、忽ち侍臣らの爲に宮中へ引戻され、それより日夜懊惱として樂まず、遂に又耐へられて、一日牧羊者の妻に身を委して、再び密かにフォーニヤを訪へり。かくて、其切なる戀を彼女に語りて、「癖は我此假裝をあさましとも見たまはんが、天上の神々さへも戀の爲には禽獸とも植物とも變形せられし例ありなど振き口説き、「我れは飽迄も癖を正妻とせん心なり」と誓ひしかば、フォーニヤも遂に否みかれて、王子の心に従ふべきを約しぬ。されど、此國に在らんには、到底二人が戀を遂げ得べくもあらず、如かず密かに伊太利本土のいづちへ奔りて、父王の遊らん頃まで隠れをらんにはと、よりより出奔の準備をなし、旅費にとて金子及び寶石類を取集めなどせり。宮中にては、これらの事を誰れ一人心附ける者もなかりしが、牧者夫婦は、女の許へ屢々通ひ来る若き男を漸く王子なりと覺り知りて、驚くことを大方ならず、此事若し露顯せば、王必ずや激怒せられ、吾々夫婦

命も危かるべし、須からく其沙汰なきうちに、あのフォーニヤは拾ひ子にして我實子にあらぬ由を自訴し出で、救を乞ふべしと、夫婦協議の上、牧者は彼の拾ひ物の記念品くま／＼を携へて、急ぎ王宮へ赴かんとする。之より先、王子の老僕にカプニオ Capnio といふ者あり、はじめは王子の無分別を諫めて無謀の出奔を思ひ止まらせんと試みしが、所詮其止みがたきを知るや、自ら先に立ちて、王子の爲に何かと便宜を計り、便船の準備等をなし、いよく順風といふ日、先づ王子らを船に上らしめおきて、おのれは残れる小荷物を携へつゝ、其後を追はんとせり。然るに、偶然にも、其途上に於て、今しも記念品を携へて王宮へ赴かんとする牧者カプニオに邂逅せり。機敏なるカプニオは早くも牧者の眞意を察知し、すなはち巧みに欺きて、「王は今涼を納れんとて船中に在す。吾れ汝を案内して拜謁せしめん」といふ。牧者之を實とし、濱邊までは共に行きしが、いさ軽に乗らんとする間隙となりて、やゝ惟みて脚離せり。カプニオかくと見て、遂に暴力を用ひて牧者を王子らの乗れる船へ伴ひ

行き、理不盡に便乗せしめて、伊太利さして出帆す。
かくて王子ドラスタスは、父をも、國をも、王位をもフォーニヤの愛に見替へて順風に船を走らせつゝ、最初一晝夜は何事もなく航路を進めけるが、翌朝となりて、颶風俄に吹起り、剩へ三日の間荒れつゞきしかば、船中擧つて生きたる心地もなかりしが、第四日目に至りて、辛くも或港口に漂着せり。さて、そこをいづこかと尋ねしに、是れボヘミヤの首都に屬する港にして、すなはち彼のバンドストー王の居在處なりける。ドラスタスには、バンドストーとは只怖ろしき聯想を傳ふるのみの名なりければ、福ひあらんを憚り、トラパロニヤの一武士メリヤグラスと偽名して上陸し、次の便船の來るを俟てり。然るにフォーニヤの美貌の噂忽ち全部にひるがり、遂に宮中に聞えしかば、五十歳となれる今も、尙若き心止まぬバンドストーは見ぬ戀にあこがれ、其共に在る男らを敵國の間諜ならんと誣ひて一同を宮中へ拘致し、かくて理不盡にもドラスタスを獄に下し、フォーニヤを、或は

甘言を以て、或は威嚇して、其心に従はしめんとす。とかくする間に、シ、リヤ王、我子のボヘミヤに囚はれとなりしことを傳へ聞きて急使を送る。此に於て、牧者一切を白状し、フォーニヤの素性明かとなり、バンドストーは且つ驚喜し且つ慙愧して、王子らと共にシ、リヤに赴きて、イジスタスにも對面し、そこにて王子王女の婚儀を了へて後、自殺す。

以上によりて、第二部に關する限りは、沙翁の原作に負ふ所の僅少なるを知るべし。愉快なる無頼漢オートトリカスの性格の如き、種々の喜歌劇的要素の如きは勿論、國王主

従が假装して農家を訪ふ事、及び王妃の死せずして匿かくまはれをり、彫像に扮して其夫王に再會する事等は悉く沙翁の創意に出でたり。筋の自然をいへば、原話の方、例によつて幾らか優りたり、されど沙翁の此劇の瑕疵とせられたる時代、地理、風俗等の錯誤は、既に原話中に存在せるのみならず、ロマンス劇としての効果よりいへば、劇の脚色の方原話のに優れること論を俟たず。此類の劇は史實もしくは論理を以て律すべきものにあらざればなり。此作上の演史に關する記事は、豫定紙數の都合上、略す。

大正七年九月下旬

譯者 識

登場人名

一 旅人
一本夫

リオンチーズ、シ、リヤ王。

マミリヤス、シ、リヤの幼王子。

カミロー

アANCHIゴナス

クリオミニーズ

ダイオン

シ、リヤの貴族。

登場人名

ボリクシニーズ、ボヘミヤ王。

フロリゼル、ボヘミヤの王子。

アイキデーマス、ボヘミヤの貴族。

親の牧者、パーディタの養父。

伴の牧者、(道化方)。

オトリリカス、無頼漢。

一水夫。

一牢役人。

ハーマイオネ、リオンチーズの妃。

パーディタ、リオンチーズとハーマイオネとの女。

ポーライナ、アンチゴナーナスの妻。

イミリヤ、ハーマイオネの侍女。

モブサ、村の娘。

ドオカス

其他、貴族、紳士、官女、役人、従者、男女の牧者らの

多数。

説明役としての「時」。

場所

幾場かはシ、リヤ、幾場かはボヘミヤ。



冬の夜むかし

第一幕

第一場 リオンチーズの宮殿内
溜りの間

シ、リヤ王^ワ リオンチーズの老臣^{ラウジ} カミローと
外^{ガウ} 宿^{ヤク} ボヘミヤ王^ワ ボリクシニーズの老臣^{ラウジ} アー
キテームスと出る。

アリキ カミローさん、若し^ニ 貴下^{キミカミ} が手前^{テマヘ}と同じ
やうな殺^{コロ} 廻^{マワ} りで、王^ワ のお侶^{トモ} をして、ボヘ

カミローさん、若し貴下が手前と同じやうな殺廻りで、王のお侶をして、ボヘ
キテームスと出る。
シ、リヤ王 リオンチーズの老臣 カミローと
外宿 ボヘミヤ王 ボリクシニーズの老臣 アー
キテームスと出る。

ミヤへお出でなさるやうなことがあるとすると、先刻も申したつけが、シ、リヤとボヘミヤとでは、大變な違ひだとお感じなさるでせう。

カミロ

多分此夏は、我王が、此度の御返禮に、貴國王殿下を御訪問なさるでせう。

アーキ

其場合には、きつとお饗應が粗末なので、恥入りませうが、そこは誠心誠意といふ點で申しわけを致すことにして、……と申すのは……

カミロ

とおつしやるのは……

アーキ

いや、豫め解り切つてゐることですから、有りのまゝに言ひますが、手前方面では、逆も斯様な立派な……かういふ稀に見る……何と申してよいか解らんやうなお饗應は出来ません。……手前方面では、酒でもお勧めして、眠させ申すやうに致すでせう、御酩酊の餘り、御待遇の不束なのにお氣が附かないで、たとひお美め遊ばされんまでも、御非難遊ばすやうなことはないやうに。

カミロ

適當の御挨拶で痛み入ります、どう特別に心を籠めたお饗應でもありませんのに。

アーキ

いや、實際、さう存じてゐるので、正直に、口を衝いて出るまゝを申したのです。

カミロ

我シ、リヤ王は、貴國王殿下に對しては、あくまでも御懇切であつて當然です。御幼少から御一しよにお育ちなされたのですから、枝葉を生ぜざるを得ないやうな御交情が、既に其頃から根ざしてゐたのです。ところが御成長の後には、お双方とも、國君としてのお務が多端なため、とかく御面會の機がないので、互ひにお使者を遣はされて、只折々のお消息、お贈り物で、御面會はなさらなくても、殆ど御一しよに在らせられるも同様です。すなはち山海千里を隔てながら握手をなされ、風位の兩極端にいらつしやりながら抱き合つてお在になるとでもいふべきお間柄です。どうか此お

交誼が永遠に渝らせられませんかやうに！

アーキ いや、どんな陰謀も、どんな事變も、到底お双方の御友誼を覆すことは出来ません。……時に、あのマミリヤスさまのやうな若君のお有りなさるのには、申し盡されん程の貴國のお幸福ですなア、あんな末頼もしい若君は、手前はじめてお見受しました。

カミロ いかにも、御同感です。王子は立派なお子さんです。あの方をお見上げ申すと、萬民の病んだ心も慰み、老いたる心も若やぎます。御出生前にさへ既に撞木杖を突いてゐた者共までが、あゝどうか、丁年とおなりなさるまでは生きてゐたいなぞといひます。

アーキ 若君の事さへなけれア、甘んじて死ぬ手合でせうかな？

カミロ さア、他に口實がありませんければね、餘儀なく。

アーキ いや、若し王子が無かつたなら、せめてお一人出来るまでは、撞木杖に絶つ

ていも、生きてゐたいなぞといふでせう。

二人顔を見合せて笑ふ。入る。

第二場 同宮殿内の大廣間

シ、リヤ 王リオンチーズ、其妃ハーマイオネ、幼王子マミリヤス、外賓ホヘ
ミヤ 王ボリクシニーズ、前の場のカミロ、井びに侍者役ら出る。

ボリク 王座を主なしにしておいて、予が御地へ參つて以來、牧羊者の目には、もう既に大陰が九度までも盈虧しました。大兄、按ふに、それに等しい日月の間、此回の御優遇を感謝しつゝけたとしても、尙且つ償ひ盡しがたい恩恵を荷つて、お國を去るやうな次第となります。ですから、空なお禮の辭だけを、置處のよい零のやうにと望んで、前々申し來つた數千回のそれに

加へて、もう一度重ねます。……「ありがたうございます！」

リオン 其御挨拶は、まあ、いよゝく出立といふ間際までは、とツときにしておいて下さい。

ホリク いや、其出立は明日と定めました。實は、不在中に、國元で何事かありはしないか、起りはしないか、と頻りに疑懼の念が浮びますので、「あゝ、あの豫感が適中した」なぞと、後でわたしに言はせるやうな烈風が國元で吹き荒れてゐなければよいかと禱つてゐます。それに、餘り長く逗留致してゐて、御迷惑を掛けました。

リオン ねえ、お互ひは、そんなことを迷惑がるやうな間ぢやアないよ。

ホリク いや、もう逗留は出来ません。

リオン もう一週間だけ。

ホリク いゝえ、實際、明朝。

リオン ぢや、中を取つて、もう半週間だけ。これだけは是非とも聽いて下さい。

ホリク どうか、そんなに御強迫なさるな。凡そ世の中に、貴下の言葉ほどわたし
の心を動かすに有力なものはないのです。で、どんなに歸らなければな
らなくつても、留まつて貰はねばならんと貴下がおつしやれば、わたしは
否とは言ひ得なくなる。けれども、今は、いやでも應でも、わたしを國元
へと引摺るのです。それをお留めなさるのは、御深切のだが、わたしに
取つても、一の苦痛であり、又貴下がたに取つても、御迷惑です。大兄、双
方の迷惑を除くために、これでお暇することにしませう。

リオン (絶を顧みて) あんたは何にも言はないのかい? 何とかおつしやいよ。

ハーマ あなた、わたくしは、あのお方が如何しても留まることは出来ないと斷言
つておしまひ遊ばすまでは、差控へてゐようと存じてゐましたのです。
ねえ、あなた、あなたの御勸誘よりは、まだく冷淡過ぎますのよ。何故、ホ

へミヤのお國表には、一切何事も無い、とおつしやいませんの？ それ、此間のおお消息で以て、明かちやございませんの？ それをおつしやれば、あの方の御證據はすぐ敗れてしまひませう。

リオン 願心！ うまいことをおいひた。

ハーマ 若しあの方が、お子さんの顔が見たいからとおつしやるのなら、それは御歸國の止むを得ない理由でもありません。さうおつしやつたのなら、お歸らせ申すより外はありません。さう御誓言遊ばしたのなら、お留め申しますどころか、紡輪竿で打叩くやうにしてまでも、お歸らせ申すでせう。けれども（と言ひながら、ボヘミヤ王に對ひて）殿下のお軀を是非ともわたくしは、もう一週間だけ借用いたしたうございませう。其代り、お國へ夫をお伴れになつた時分に、豫定以上一ヶ月はお留めになつても、異議は申さないことにしませう、と言つたつても（と夫王を見つへりて）リオンチイズ、わたしの

貴下を思ふ情が、何處のどの婦人の其夫に對する情に比べても、掛時計のあのチツといふ一聲ほども劣つてゐるわけではありませんのよ。……（ボリクシニーズに）お留まり下さいませんの？

ボリク 折角のお勧めですが、どうも。

ハーマ いゝえ、さうおつしやらないで。

ボリク いゝえ、留まれませんよ。實際。

ハーマ まあ！ そんな手輕な、實際なんぞといふ只た一言の御誓言ぐらゐで、お言ひぬけ遊ばすの？ いゝえ、どんな、御誓言をなすつても、天上の星を下界へ引下すやうな御誓言を遊ばさうとも、わたくしは「いゝえ、お歸し申しません」といひますのよ。はい、實際、お歸り遊ばしてはいけません。女の口から出た實際も、男子方のお口から出たのと、力に於ては變りませぬよ。どうしても歸るとおつしやるの？ 止むを得ませんと、賓客として

はなく、捕虜としてお留め申すやうになるかも知れませんよ。それですと、お立の時分に、お禮をおつしやるには及びません、入費をお拂ひになるとも。どう遊ばすの？ 捕虜にお成り遊ばすの？ 賓客にお成り遊ばすの？ 只今の、怖アい御誓言通り、實際、どちらかにお成り遊ばさんけりやなりませんでせう？

ホリク ちや、あなたの賓客になりませう。捕虜といふと、是非何等か



の罪を貴女に對して犯したことになるが、それは、貴女が刑罰をお下したる事のあるまじきよりも、更に一層あるまじき事なのですから。

此前後に、リオンチーズは二人を離れて他の方角へ歩いて行く。

ハーマ ちや、わたくしも貴下の牢屋の番人ではなく、御旅館の深切な女主人になりませう。さア、まづお問ねしませう、夫や貴下がお幼かつた時分はどんな風でいらしたの？ 可愛らしい若さん達でいらしたでせうねえり。

ホリク お妃、わたしたちは、其時分には、將來に今日のやうな明日があらうなんぞとも思はず、永久に少年であることが出来るやうに思つてゐました。

ハーマ 夫の方がずつと臆白でございましたらうねえり。

ホリク わたしたちは、まるで雙生の仔羊が日向ぼっこをして、啼ッくらをしてゐ

るやうで、する事はといへば、無邪氣と無邪氣の交換でした。悪い事なんかはまるで教へられたことがなく、悪事をする者が世間にあらうとさへも想像しなかつたのです。若しいつまでもあの生活を逸つてゐたら、さうして弱い氣が、強い情慾に煽られて、野心を起しなんかせなかつたら、天に對つて大膽に無罪を主張することも出来ましたらうに、……幸ひに世襲の原罪も同時に取除かれたとすれば。

ハーマ

では、何か悪いことを遊ばしましたのね、其後？

ホリケ

お、神聖な妃殿下！ 其後は種々の誘惑がわたしたちの身の上に取りました。翼のまだ生え揃はなかつた其頃には、妻はまだ處女でしたから。貴女とても、其時分には、わたしのあの遊び友達の眼中にはなかつた。

ハーマ

あらまア！（と一寸すれたやうな聲をして）もう其徳は承はりますまい、お妃やわたくしをば悪魔だとおつしやりかねないから。けれども、ま、承はります

せう。わたくしどもがさういふ不埒をおさせ申したのなら、其責任は殘らずわたくし共が負ひませう、若し貴下がたのお罪業が、わたくし共に關しましたのが始めて、さうしてその後とても、わたくし共との御關係以外には、どういふお躰頭をも遊ばしましたことがないのですなら。

此の間に立離れてゐたリオンナイズが徐かに戻つて来る。

リオン

（近よつて）説き落せましたかい？

ハーマ

御逗留遊ばしませうよ。

リオン

わたしが勧めたのぢや如何しても諾と言はなかつた。ハーマイオネさん、あなたの言葉がこんな立派な役をしたことは曾ぞないことだ。

ハーマ

曾ぞないこと？

リオン

たつた一度の他は、曾てないことだ。

ハーマ

え？ ぢや二度だけは立派なことを申しましたのですの？ いつでした

らう、其前のは？ ねえ、おつしやつて下さい。お褒のお辭で此胸を一ぱいにして頂戴家畜をお肥らせ遊ばすやうに。一つの善い行ひが噂もされずに犬死をしますと、其後へつゞくべき千の善い行ひまでが殺されてしまひます。お褒のお辭はわたし共の賃銀なのですから。拍車の方では半町とは走らせにくいわたし共が、優しいキツスの爲には五里も十里も走りますの。…ですが、肝腎のことを。あの方にお逗留を願つたのが、わたしの、つい今がたの善い行ひだとしますと、其以前のといふのは、何でしたらう？ 其姉がありましたらしいが。お、其名が阿福とでもいふのであつたら！ たつた一度立派なことを申しましたつて？ いつでしたらう？ ねえ、おつしやつて下さい。どうぞ。

リオン さア、それは、あの苦林檎のやうな、待辛い三ヶ月がやつとの事で熟し切つて、お前さんがその眞白な手を開いて、わたしの戀人にならうといふ最後

の承諾をしてくれた時です。あの時に、お前さんが「わたくしは貴下の物です」と然う言つてくれたのです。

ハーマ なるほど、それならば全く阿福ですの！…そらね、御覽遊ばせ、わたしは二度までも立派なことを申しましたでせう。さうしてそれで、一度は立派な夫をもうけましたし、二度目には、立派な御友人を暫くお引留め申しましたわね。

新う言ひすて、再びホリクシニーズの傍へ行く。それを、不安げに横目で見て

リオン (傍目) あんまり熱し過ぎる、熱し過ぎる！ 深切の度が過ぎると、遂には情慾の交換ともなる。…何だか胸騒ぎがする。心の臓が踊る、けれどもそれは嬉しいからちやアない。嬉しいのちやアない。あの欺待は、全くの無邪氣な心からでもあらう、あの無遠慮も、深切な、優渥な、豊かな好意

からするのでもあらう、随つてあつたからつて、何等の不都合もないのでもあらう。けれども掌や指を、あゝ、あんな風に、弄つたり、握りしめたり、鏡に對つた時なぞのやうに、あんなこしらへた笑ひ顔をして見たりして、さうして死にかゝつた鹿のやうな、あんな溜息をするなんぞは、あゝどうも嫌な、好もしくない歎待ぶりだ！ あゝ額が氣にかゝつて來た！……

(急に傍らの王子を見返つて) マミリヤス、お前はおれの子か？

マミリ はい、お父さま。

リオン 全くか？ いゝ子だ。威心々々。や、お鼻を汚くしてゐるね？……

(獨語のやうに) おれに生寫しだと皆なが言ふ。……(又王子に對ひて) おひく！ 大將さん、お鼻の掃除をおし、まるで掃帚を突つてゐた羊か何かのお鼻のやうだ。きたないく。……あゝ、羊といへば！……(と苦い顔をして額をおさへながら、又向うを見て) まだ掌を弄つてゐる！……(又王子に對ひて) おい、こら

いたづら羊！ お前はおれの仔羊か？

マミリ はい、お父さま、さやうでございます。

あつた
する
よく
おれ
が
も
え
る

リオン

(半分獨語のやうに) そつくりおれに似ようといふには、頭が柔か過ぎる、それに角が生えてゐない。けれども皆なが言ふ、卵二つといふほどに似てゐると。女共がさう言ふ、彼奴等は如何なことでも言ふ。だが、彼奴等が、假令は染過ぎた黒衣裳や風や水やうに空虚な物であつても、他人の物を自分が物にと謀む奴らの使ふ假子の目のやうに虚偽なものであつても、此小僧がおれに似てゐるといふのは眞實らしい。……(又王子に對つて) おい、お小姓さん、其青い目でわたしを御覽。……可愛い奴だ！ ほんとに可愛い子だぞ！ おれの血や肉の餘りなんだ！……それなのに、どうしてお前のお母さんが、さういふことを？……愛著の然らしむる所かも知れない？ (と苦悶の表情をして) 愛著の鋭い尖鋒は物の眞底までも突通す。信ぜられな

かつた事をも事實にする。夢をも、どうしてだか分らんが、現にする。非
現實な物をさへも、空な物をさへも現實にする。して見れば、何かそこに
實物があれば、それを物にするのは、尙更の事だらう。果して愛著めがと
二人の方を見て) 許容された以上のことをしてゐる、現に！ さうしておれの
此頭を憐れさせ、此額に角を生やさせようとしてゐる！

ホリク (リオンチーズの様子を見て、不審げに、ハーマイオネに) シ、リヤ王はどうかすつた
のでせう？

ハーマ 何だか煩悶してをられるやうです。

二人とも近寄つて来て

ホリク え、どうかすつたの？

リオンチーズ 顔を背けて黙つてゐる。

え、どうかすつたの？ どうかすつたのですか、大兄？

ハーマ 大變お氣に懸る事でもお有りのやうな眉附をしていらつしやるのよ。何
かお氣に障ることでもありませんか？

リオン いゝや、決して。……どうかすると、人間は、其情に脆いおろかさを暴露し
、氣の強い連中の物笑ひになるものだ！ 實は、此小僧の顔を見てゐる

うちに、つい二十三年以前の昔へ戻つて、自分がまだ細袴も穿かず、縁天爲
絨の上被を着て、短剣とても、主に怪我をさせぬやうにと……どうかする
と、裝飾がとんだ害になることがあるから、さうならんやうにと……しつ
かり鯉口を止めた奴を佩んでゐた頃の事を思ひ出してゐた。あゝ、あの
頃には、此豆粒どのに、此おちびさんにそっくりであつたのだと思つてゐ
たのです。……(マミリアスに) おい、眞正直さん、お前は、卵をお金だといつ
たら、取るかい？

マミリア いゝえ、決闘します。

リオン 決闘する！……どうか幸福者になりますやうに！……（ホリクシニエズに）仁兄、君もお國の幼さいのをお可愛がりなさるか、わたしが此兒を斯うして愛してゐるやうに？

ホリク 國に居れば、幼兒めはわたしの勞働でもあれば娛樂でもあり、又大事件でもあるのです。今信友かと思ふと、忽ち仇敵になります。陪食者にもなれば、大將にもなれば、大臣にでも何にでもなります。彼兒がある、六月の日も十二月のそのやうに短かくもなります。血を濁らせるやうな厭な思ひも、彼兒の取りとめのないあどけなさには慰められます。此お幼どのが、ちようど其役廻りをわたしにしてくれるのです。だから、わたしは、此兒と二人で、奥へ往くから、どうか君たちは大人同志で……ハーマイオネ、わたしに成代つて十分に款待して下さい。シ、リーの物は、どんな高價な物をも、すべて廢物だと思つて。お前さんと此いたづら

とに次いでは、わたしの最も大切に思ふ仁だからね。

ハーマ もしお尋ねでしたら、庭内にをりますよ。ようございませうか？

リオン 好きなやうになさい。どうかして見つけるだらうよ、此空の下にお在なら。

輕く笑つて、二人から離れながら

（傍白）かうして釣つてゐるのだ、輪を延してゐるのに氣が附かないのだ。

馬鹿！ 馬鹿め！……どうだ、まるで彼女の口がくつつきさうだ、あれの嘴が！ 天下晴れての夫にでも對するやうに、大膽に抱いたり、かゝへたりしてゐる！

ホリクシニエズ、ハーマイオネ及び侍者役ら入る。

もう去ツちまつた！……あ、おれは、太い角が生えて、頭までも、耳際までも溝泥の中へ陥ツちまつたんだ！……（マミリヤスに）さ、あツちへ往つて

お遊び、劇をしてお遊び。お母さんは劇をしてゐる。おれも劇をして、あさましい役を勤めるんだ、死ぬまで恥になるやうな役を勤めるんだ。阿呆よ、馬鹿よと罵り笑ふ聲が、おれの葬式の鐘になるだらう。……さ、あつちへ往つて、お遊びく。……妻に不義をされた男の前例は幾らもあつたのだ。さういふ男共は、みんな半狂人になるんだとすると、人間の十分の一は首を縊つてしまふことになるだらう。此苦みを救ふ道はないのだ。淫亂な星の下で生れた以上、到底まぬかれることは出来ないのだ。何千人と此病氣に罹つてゐるんだ。けれども氣が附かないでゐる。……

マミリヤスが呆れて見上げてゐるのに心附いて

おい、どうしたの？

マミリ みんなが、わたしをばお父さまに似てゐるといひます。

リオン さうか、そりやまだしもだ。……（此時近寄つて来たカミローに急に目を附けて）お

や！ カミローか？

カミロ はい、さやうでございませす。

リオン （マミリヤスに）さ、往つてお遊び。お前は立派な、正直な男だからなう。

マミリヤス 入る。

カミロー、客人は、もう暫く逗留するらしい。

カミロ 御碇泊になりますやうにと、御前がお手づから鑑までお下してございましてつけが、とかくそれが浮返つてしまひましたつけが。

リオン （意味ありげに）見てゐたか？

カミロ 御前がどんなにお留になつても、お聴になりませんでした。御用向の方が重大であるやうに仰せられました。

リオン え、氣附いたか？……（傍目）奴らはもう予の噂をしてゐる、目ひき、袖ひきして、耳こすりをしてゐる、「シ、リヤ王は云々だ」など。これほどまでに

なつてゐるのだ。予が一等後で氣が附いたのだ……カミロー、どうして彼仁が逗留することになつたと思ふ。

カミロ 御貞淑な妃殿下の御懇請によりまして。

リオン (傍白) 妃殿下には相違ない。貞淑といつたつてもいい譯だが、今は當らな
い……え、汝以外の者も、分別のある者は、そこに氣が附いてゐるのか？
汝は機敏なのだから、竝の鈍物共の氣の附かん事をも吸ひ込む方だから。

……はしっこい奴らの外は、氣附いちやゐないか？ 非凡な頭を有つてる
奴らの外は？ え？ 下等な奴らは、よもや威附きやしまいなア、一件に。
どうだ？

カミロ へ、一件とおつしやいますのは？ 大概の者が心得てをります、ボヘミヤ
王の御逗留になりますことは。

リオン えッ！ 何？

カミロ 御逗留になりますことを。

リオン だがさ、なぜ逗留するか？

カミロ 御前の御意でもあり、妃殿下の御懇望でもございしますので。

彼女の懇望！ 彼女の…… (氣短かげに) もういゝ、もういゝ…… (改まつて)

カミロー、おれは今日まで、何もかも汝には打明けて來た、極めて秘密な、
だれにも言はないやうな事までも汝には話し、汝もいろく慰めたり諭
したりしてくれて、予もまた懺悔したり、改心したりして、さうして汝に別
れたものだ。けれども、今考へると、汝を正直者だと思つてゐたのは思ひ
ちがひだつた。

カミロ めつさうなことを仰せられます！

リオン いゝや、實際、汝は正直ではない。或は多少正直だとすれば、汝は臆病者だ。
正直を中途半端にして、逡巡して、行くべき處まで行かない。で無ければ、

重大な信任を蒙つてゐながら、怠慢な振舞をしてゐるのだと解釋しなければならぬ。で無ければ、馬鹿だ。真剣勝負の大賭博がはじまつて、貴重な賭物が與奪されてゐるのに、汝はそれを見ながら、戲談だと思つてゐるのだ。

カミロ

御前さま、或は、手前は、怠慢な振舞をいたしてをつたかも知れません。又馬鹿であり、臆病者であるかも知れません。それらは、人間の免れかねまする所で、ともすれば此三弱點は、此世の中の無數無量の所行中から芽を出します。御前、若し手前が御用を勤めながら故と怠慢の罪を犯しましたやうなら、それは手前の愚か故でございます。若しまた勉勵は致しながら愚かなことを、仕りましたなら、それは御趣意をよく辨へをりませなんだ爲故の怠慢でございます。若しまた御用の結果を危み、これは寧ろ實行しません方がよろしからうと存じまする所から、尻込を致しま

したのなら、さういふ臆病は、賢人とても免れ得なからうと存じます。御前、これらは、正直者にも有りうちと見做されをりまする弱點でございます。が、恐れながら、有りのまゝを仰せられて下さいませ。手前の不埒の次第を明白に承はりました上で、尙お否み申すやうなら、それは全く覺えないのだとおぼしめされたうございます。

リオン

カミロー、其方は見なかつたか？ いや、疑ひもなく、見たに相違ない。見なければ其方の眼睛は姦通される夫の頭の角よりも鈍重なのだ。……または聞かなかつたか？ あれほど明白である以上、噂の立たん筈はない。或は感附かなかつたか？ あれを見ても、妻の不品行に感附かないやうなら、判断力が無いも同様だ。さ、さうだと白状しないやうなら、汝は目も耳も判断力もない不具者だ。さ、妻は淫婦だと言へ、結納も済まんうちに不埒をする絲取り女同然の淫婦だと言へ。さ、其證明をしろ。

カミロ 若しお妃さまが、餘人からさういふ悪名を負はされ遊ばしたのなら、手前は直さま復讐をいたさずにはおきません。とんでもない仰せでございませう、御前のおつしやるべきお言葉ではございませぬ。よしんばそれが事實にもいたせ、重ねてさやうな事を仰せられますのは、其御嫌疑の事件に匹敵するほどのお罪悪だと存じます。

リオン 耳こすりをして何でもないと言ふのか？ 頬と頬とを摩り合はせても？ 鼻と鼻とを？ 舌を吸ひ込むほど口を寄せても？ 笑ひかけて、急に止めて、溜息をしても？ はつきり不貞操をしてゐる標象だ。え、脚を絡み合せても？ 隅っこへ引込みたがつたり、もつと速く時計の針が動けばいゝ、早く晝になり、夜中になればいゝと願つたり、他人の目は残らず底翳になつちまつて、自分だけが、他に見られないでゐたいと願つたりしても？ それでも何でもないのか？ え、ちやア、此世界も、此世界にありと

あらゆる物も何でもないのだ。此大空も何でもないのだ。あのボヘミヤも何でもないけりや、妻も何でもない。何もかも何でもないのだ、それが何でもなければ。

カミロ 御前さま、それは全くのお邪推でございます。お止めなさいまし、とんだお間違ひの基となりますから。

リオン うんにや、さうだと言へ、眞實だと言へ。

カミロ いゝえ、とんでもないこととございます、決してそんな事はございませぬ。リオン いゝや、有る。うそをつけ。汝は嘘つきだ。憎い奴だ。馬鹿だ、間ぬけだ。さうで無けりや、善いも悪いも十分に承知の上で、何方へも都合のいゝやうに合槌を打つてる奴だ。若し毒が妻の肝の臓にまで及んでゐるとすると、もう砂時計の一皿だけでも生かしちやアおかれぬのだ。

カミロ だれがそんな毒を盛りましたのです？

リオシ 知れたことだ、小畫像のやうに彼女を頸筋から垂下らせてゐる彼のボヘミ

ヤが盛つたのだ。若し予に予の榮辱を自分の利害のやうに、損得のやうに見てくれる目を持つた家來があれば、奴らに二度とあゝいふ不埒をさせないやうにもしてくれべきだに。

それなのに、汝は、……彼仁の捧盃役を勤めてゐる汝は、……もとは卑賤な者であつたのを予が高官に取り立て、やつたのだ。汝は、天が地を、地が天を見るやうに明瞭に予の苦みを見てゐる筈



だ。汝が酌をする序に、一寸薬味を加へさへすりや、あの予の仇敵を永眠に就かせてしまふとが出来るんだ。さうしてそれは、予の爲には、強壯劑になるんだ。

カミロ 御前、それは随分やつてのけませう、しかも激薬などは用ひませんで、漸々に効果を生ぜさせる法もございます。けれども手前は、お妃さまに、さういふ御失行がお有り遊ばされるとは、どうしても信ぜられません、此上もないお貞女であらせられますから。もとより手前は御前さまを、深く愛敬致

リオシ え、信じなけりや、勝手に腐るまで疑つてろ！ 疑ふことの出来んやうな理由がなくって、こんなな煩悶し、こんなな惱亂し、こんなな苦むことがあり得ると思ふか！ 寝褥が清らかであれば安眠も出来るが、それが汚されたとなると、そこら一面が荆棘だ、針だ、蜂の尻尾だ。深い理由がなく

ツて、何で自分で、現在我子だと思つてゐる王子までも侮辱するもんか？
そんなことが人間に出来ると思ふか？

カミロ 御前をお信じ申さないわけにはまゐりません。では、仰せに随つて、ポヘ
ミヤ王を處分いたします。が、豫めお願がございます、あの方がお亡くな
りの上は、どうかお妃は、最初お迎への時同様に御待遇遊ばされますやう、
王子のお爲とおぼしめされました。さうなれば、朝廷内に於ても、又御關
係の諸外國に對しましても、いかゞはしい噂を封じ込めてしまふことが出
來ますから。

リオン おれもちやうどその通りに考へてゐたところだ。妃の不名譽になるやう
なことはしない、決して。

カミロ 御前、ではお奥へ入らせられました、御親友の御宴會らしく、晴れやかなお
面附で、ポヘミヤ王やお妃とお話を遊ばしませ。手前があのお方に盃を

お勧め申す以上、それが別條ないお酒でありますやうなら、手前を御家來
でないとおぼしめしませ。

リオン よろしい。さうしてくれ、ば、予の心の半分は汝の者だ。爲なければ、
汝の心の破滅だぞ。

カミロ きつと爲てのけます。

リオン 汝のいふ通り、親友らしく見せかけよう。

リオンチーズ入る。

カミロ あゝ、お氣の毒なお妃！……が、ま、何といふ境遇だ、此おれの立場は？

あの善良なポリクシニスどの、毒殺者にならねばならん。其理由は、
主君の御嚴命。主君は自ら欺いて、御本性に戻つたことを臣下一同にま
でさせようとなさる。……此御用を勤めれば立身が出来る。が、たとひ神
聖な國王たちを打殺したお庇で出世をした幾百千の先例が見附かつたか

らッて、さういふことはしたくない。況んや、銅にも石にも羊皮紙にも、そんな記録はないのだから、専門の悪人だつても、これは見合せさうなことだ。…朝廷を脱出すより外にしやうはない。命令通りに爲ても、爲なくても頸があぶない。どうか詳しいお星がお守りなすつて下さるやうに！

…（向うを見て）あ、ボヘミヤ王が見えた。

ボリクシニーズ又出る。カミロー俯向いて、黙つて行過ぎる。

ボリク （不審さうに見て）こりや不思議だ。大分待遇が變つて來たやうだ。物もいはない？…カミロー、今日は。

カミロ （はじめて氣附いたらしく）これは、御機嫌よういらせられまして！

ボリク 何か珍らしいことはないかな？

カミロ 別段かはりましたこともございません。

ボリク 王がむづかしい顔をしてをられる、身に代へる程の大切な領分でも失くさ

れたかと思ふやうな顔附をしてをられる。つい今がたも顔を合せたから、いつもの通り挨拶をしたが、餘所へ目を外して、への字口をして、さつさと往つてしまはれた。あゝ様子が變つたには、何か仔細があらうと不審に思つてゐるところだ。

カミロ さア、手前は、それを存じてをるとは申しかねます。

ボリク え！ 申しかねる！ 存じてゐないならばだが。存じてはゐるが言ひかねるといふのか？ 打明けて下さい。え、（と意味ありげにカミローの顔を見て）

こいらだらう？ 何故なれば、知つてゐる以上、自身には、それが言へない筈はないのだから。カミローさん、お前さんの顔の色の變つたのでわたしの顔の色の變つたのが分る。わたしも知らずく此變化の仲間入をしてゐるのに相違ない、何となく以前のやうでないことを感じるやうになつて來たから。

カミロ 世間に一種の病ひがございまして、人がどうかすると罹ります。其病ひの名は申し上げられませんが、それは貴下が御本原で、貴下はまだお健康でいらせられますけれど。

ボリク え！ わたしが本原だ？ おい、わたしを一目見りや人を殺すといふ傳説のバシリスクだと思つて貰ひたくないね。わたしは今迄に幾千人といふ人を見た、それらの者はわたしに目を掛けられて出世こそしたれ、一人だつて殺された者はない。カミロー……お前さんは儘かに紳士だ、加ふるに、父母の美名と同様に、上流者の立派な飾りとなる學問上の履歴にも富んでゐる人だ……わたしが知つてゐべき筈の事を何か知つてゐるのならば、どうぞ、隠しておかないで、知らせて下さい。

カミロ お返辭をいたしかねます。

ボリク (考へて) わたしが其病ひの本原だ、けれども、わたしは健康でゐる！……こ

りや如何しても聽かなけりやならん。おい、カミロー、折入つてお前さんに頼む、苟も士君子を以て居る者ならば承認しなければならん一切の義務に掛けてお前さんに頼む……しかも、さういふ頼みの中の最小ならざるものとして頼むのだ……ねえ、氣附いてゐるのなら、わたしの身に迫つてゐる災厄といふのは何だか、どうぞそれを言つて下さい。どの位迫つてゐるのか、どうしたら防がれるか、若し防がれるとすれば、防がれないとすれば、どうするが一番よいか？

カミロ では、申しあげませう、正しい貴下さまの命であつて見ますれば、正義上、申さない譯には参りませんから。しかし手前が御忠告申すやいなや、すぐさまそれを御實行遊ばさなけりやいけません、で無いと、貴下もわたくしも命はございませぬ、萬事おさらばでございます。

ボリク さア、そのわけを。

カミロ 手前は貴下を殺します役目を申し附かりました。

ボリク え、だれに？

カミロ 王に。

ボリク どういふわけ？

カミロ 王は貴下がお妃と不義をしてお在遊ばすと思つてをられます、堅く信じてさう断言してをられます、現にそれを目撃したのだ、寧ろわざと然うさせるやうにしたのだと申されます。

ボリク お、(と天を仰いで)假にもそんなことがあれば、此体内の最も清い血が腐つた煮凝りのやうになつてしまへ！ おれの名を、あの古今無類のお方を陥れた大悪人のユダと同列にしてしまつてくれ！ おれの最近の最大の、名譽も、けふ限り、腐つて悪臭を發して、如何な遲鈍な感覺の者も手が傍へ行くと、鼻を掩つて避け、噂にも記録にも見聞したことの無い大悪疫以上

に、おれの名は嫌はれ、憎まれるやうになつてしまへ！

カミロ たとへ天のあらゆるお星さまをお祈り遊ばさうと、其お通力に掛けて如何御誓言遊ばしませうとも、それは月の感化を受けるなと海にお命じになるも同様です、王の僻み切つたお考へを如何遊ばすことも出来ません、お邪推の基礎は、極めて深いのですから、お體が續いてゐる限りは止みません。

ボリク どうしてさうなつたのだ？

カミロ それは存じません。が、どうしてさうなつたかといふ事の御研究よりも、さうなつてしまつた以上は、それをお避け遊ばすが肝腎でございます。手前の面目を御信用遊ばすなら……それは此皮袋に收れたまで、お預け申しますから……今夜すぐにお逃げ遊ばせ！ 御家來乗へはわたくしが窃と此事をお知らせして、二人三人ぐらゐづ、別々の御門からお城外へ落しませう。わたくしは一身を擧げて御奉公に供します、此事をお知ら

せした上は、こゝには居られませんから。お躊躇遊ばすな、兩親の名譽に
 掛け、此事は相違ございません。或は尙留まつて實否を判したいとおぼ
 しめすかも知れませんが、わたくしは留まりかねます。貴下とともお危
 うございます、王が口づから死刑を宣告せられた罪人も同様の御境遇です
 から。

水リウ

お前さんを信じます。王の心は其顔の色に見えてゐた。…さ、手を。(と
 握手をして)わしの水先案内になつて下さい、末長くお前さんを傍に置くか
 ら。わしの船はとうに準備が出来てゐる。者共は二日も前に出奔する積
 りでゐたのだ。…此邪推の原因はあの絶世の淑女だ。原因が無類の婦
 人だけに、又其身分が高いために、嫉妬が激しいに相違ない。それに、信
 友と名宣つてゐた者に侮辱されたとばかり思ひ込んでゐるのだから、其
 警が特に猛烈であるに相違ない。おそろしくなつて来た。あゝ、神速な

幸運よ、願はくは吾を守つて、貞淑な妃を安んじてくれ、何の故もなく王の
 邪推の片割れとなつた妃を！…さア、カミロー。こゝから無事に逃が
 してくれれば、足下を父とも思ふぞ。さ、早く避けよう。

カミロ
 どの御門の鍵も、わたくしの権内にごさいます。もう寸刻も猶豫は出来
 ません。さ、おいでなさいまし。

二人ともに入る。

* * * * *



第二幕

第一場 リオンチーズの

宮殿の一室

妃 ハーマイオネと王子マ
ミリヤスと侍女らと出
る。ハーマイオネは姫
中なので懐かしげに
してぬる。

ハーマ (うるさいうに) 此兒をそつちへ
伴れていつておくれ。うる

さくツて為様がないから

甲乙の侍女、王子をや、離れた方へと誘ひながら

甲侍女 (王子に) さ、御前さま、わたくしが御一しよに遊びませう。

マミリ うゝん、汝たちは厭だ。

甲侍 なぜでございますの？

マミリ 汝は子をきつうくキッスをして、さうして全然おれを赤んぼか何かのやうに口をきくから厭だ。…(乙侍女に) 汝の方が好きだ。

乙侍 あら、どうしてやございますの？

マミリ 眉が黒いからぢやないぞ。けども、衆なが然う言ふぞ、眉の黒いのは或女には似合ふツて、濃過ぎぢや不可いけども、ペンで晝いた三日月のやうに半圓だと。

乙侍 だれがそんなことをお教へしました？

マミリ うゝん、女の顔を見てるうちに學えた。……(甲侍女に)おのしの眉は何色?

甲侍 青でございます。

マミリ や、そりやをかしいや。鼻の青いのは見たことがあるけれど、青い眉てのは知らないや。

甲侍 もし……。……(少し聲をひそめて) ねえ、お母さまがすん／＼圓うくお成り遊ばすでせう。で、今に、お綺麗な、新規の若君さまに、わたくし共がお目見えをいたしますのよ。さう成つたら貴下はわたくし共とお遊び遊ばせよ、さう遊ばせと申し上げましたら。

乙侍 ほんにお妃さまは、きのふけふ、目立つて大きくお成り遊ばしたことね。

どうか御無事でおめでたが済みますやうに?

侍女ら 賑かに笑ふ。

ハーマ 何か偉い議論でもはじまりましたか?……(マミリヤスに) さ、いらつしやい

よ、また相手になつてあげますから。わたしの傍へ掛けて、何かお話をし
て頂戴。

マミリ をかしい話? まじめな話?

ハーマ あなたが一等をかしいと思ふ話を。

マミリ 冬はまじめなお話の方が一等いゝのよ。お化や魔物の出るお話を一つ知
つてゐるわ。

ハーマ それを話して頂戴な。さア、お腰を掛けて。さア。一生懸命にお化の
お話を、怖らして頂戴な。あなたはお話上手だからね。

マミリ むかし／＼、ある人が……

ハーマ まアさ、お腰を掛けてさ。さうしてからお話し。

リオン ある人がお墓の傍に住んでゐました。……ね、窺と内密で話すの、あそこの
蟋蟀めが聴付けないやうにね。

ハーマ さア〜。ちや、つい、わたしの耳の傍でおつしやい。

リオン チーズ出る。玉の老臣の一人アンチゴナス、及び貴族ら、其他ついで。

リオン 其處で彼れに逢つたか？ 彼れの従者らにも？ カミローも一しよか？

甲貴族 はい、松林の向うの處で逢ひました。あんなに急いで行く人達は、手前始めて見掛けました。船に乗られるのまでも見届けました。

リオン (皮肉に) あゝ、何といふ幸福なことだ、おれの判断が適中した、些とも間違はなかつた！ あゝ、もつとサツと知らないでゐたかつた！ 豫測が適中したとは、何といふみじめなことだ！ 酒盃の中に蜘蛛が浸つてゐても、それを飲んで、平氣で席を去つて、何の毒をも受けんことがある。知らなかつたが爲だ！ が、其怖るべき成分が目に入ると、飲んだのが分ると、激しくえづき出す、喉が引裂ける、脇腹が引裂ける。おれは飲んで而して其

蜘蛛を見たんだ。カミローめが手を借してゐる、手引をしてゐる。おれを殺して、王冠を奪はうといふ奸計だ。疑つたことが悉皆中つた。おれが使つたあの不忠者めは、前から彼れに使はれてゐたのだ。彼奴が裏切したので、おれは馬鹿にされて、あいつらの玩弄物同然の物になつちまつた。……どうして各所の門がさう容易く開いたか？

甲貴 カミローが命じましたので。従来も、彼れの命令は、屢々御前の御命令同様に取扱はれてをりましたのでございませう。

リオン (不興げに) そんなことはとうに知つてる。……(姫に近づきて) 子供を此方へ渡さない。(と引奪るやうに二人を引分けて) お前さんがこれを育てたんだのがまだしものだ。……幾らか子に似てはゐるが、お前の血の方が混り過ぎてゐる。

ハーマ (驚いて) ま、どうしたいのです？

リオン (侍女らに) 子供をあつちへ伴れてゆけ。彼女の傍へよこしちやならんぞ。

あつちへ伴れてゆけ! ●彼女は今孕んでゐるのを玩物にすれば可い。(妃に) 汝を懐胎させたのはポリクシニーズなんだから。

ハーマ (聞き直つて) いゝえ、決してそんなことはありません。斯うわたくしが申す以上は、誓つてお信じ下さいますでせう、どれ程一旦はお疑ひ遊ばしても。

リオン (貴族らを見返りて) 諸卿たち、あの女をよく御覽、よく氣を附けて御覽。「あゝ、中々立派な婦人だ」と、或は足下たちが言はうとするかも知れんが、正義の念が胸にある以上は、あゝ併し、不貞不義の女であるのは笑止千萬だと言ひ足さなければなるまい。あの外側の形容だけをお褒めなさい、それは儻かに賞讃するに足る。が、若し「立派な女だ」といふ讃辭に續けて、貞女でもある」と足下達が言はうとすると、忽ち彼の譏誣者達が好んで用ひる種

種(じゆ)の侮辱手段(おじよくしめたん)が……ちやなかつた! 慈善家連(じぜんかれん)の用ひる侮辱手段(おじよくしめたん)だ、何故(なに)なれば、譏誣者連(さんしやれん)に懸つては、美德(びとく)其者(そのもの)だつても滅茶(めっちゃ)々にされてしまふからな。……で、足下(あしも)たちが「貞女(ていによ)だ」と言はうとすると、忽ち(たちま)肩(かた)をすくめるやら、フ、ンと鼻(はな)であしらふやら、へ、ツと嘲笑(あざわら)ふやらして、めちやくくに打毀(うちこ)すに相違(さうち)ない。が、誰(た)れよりも最も(もつと)それを悲(かな)しむ筈(はず)の夫(む)の口(くち)からお知らせ(し)する、……此女(こ)は姦通(かんつう)をした女(おんな)だ。

ハーマ (少しもわるびれずに) 世界中(せかいじゆう)での極重惡人(ごくじゆうあくにん)がさういふことを申(ま)したとして、尙(なほ)其(その)一言(いっごん)は其者(そのもの)の罪(つみ)を加(く)ふるに足(た)ると存(ぞん)じます。我夫(わがつと)それは全く(まった)お思(おも)ひ

ちがひでございます。

リオン お前(まへ)さんこそあのポリクシニーズを此(この)リオンチーズだと思(おも)ひちがへたのだ。おゝ、おのれ賣(ばい)……! (と言(い)ひかけて) いや、おれはさうは罵(のの)らん、お前(まへ)さんの身分(みぶん)が身分(みぶん)だから。おれが然(さ)ういふ語(ことば)を口(くち)にした時分(じぶん)には、野卑(やへ)卑(へ)

な輩らがそれに倣つて、王候も乞食も、上も下も混淆にしてしまふやうな卑陋な語を使ひ散らすやうになるかも知れんから！……（貴族らに）おれは彼女が姦通をした女だと言つた、其相手の名も言つた。其上、あの女は謀叛人だ、それからカミローが、其共犯者で、女自身さへも流石に然うだと自認するのを恥ぢてゐるやうなことまでも知つてゐる、すなはち被重ねの罪を犯した女、下賤の者共が思ひ切つた醜名を與へる其犯罪者同様の者だといふことを知つてゐる。さうして此女は、こんどの脱走にも與つてゐる。

ハーマ
 いゝえ、此命に掛けて、それは、只の一ヶ條も、身に覺えのないことです。事實が後で分りましたなら、定めしお後悔遊ばすでせう、わたくしを如是に公然侮辱遊ばしたことを！ 我夫、其時になつて、あゝ思ひちがへをしたとおつしやつたとて、わたくしの此潰された面目は、逆も十分には立ちかねませうぞ。

リオン
 いゝや。萬一にもおれの此断定が間違つてゐたら、此地球には小學童子の獨樂を支持へ得るだけの堅固さもないのだ。……え、此女を引立てろ！ 牢屋へ！ 彼女の辯護に口を開く者は、その口を開いた處で、大罪人扱ひにするぞ。

ハーマ
 （歎息して）あゝ、何か悪い星の故であらう！ 天體が瑞運をもつと人間に下し賜ふやうになるまで、忍耐するより外に爲様がない。……諸卿たち、わたしは、普通の女性のやうに、泣かうとはしません。或は、その無益しい露を落さないために、諸卿の憫みをも乾かしてしまふかも知れない。けれど、わたしの此胸には、逆も涙では消されない燃立つ正義の悲みがある。諸卿たち、どうぞ諸卿の慈悲深い心でよく分別して、わたしの罪の有無を裁断して下さい。其上で、王の御意通り、いかやうとも！

リオン
 （手強くまだ退らないのか？）

ハーマ (侍女を見返りて) わたしと一しよに往く者は? (と言ひながら、王に向つて) どうぞ侍女共を召伴れて往くことをお許し下さいませ。今の體の都合上、必要でございますから。…(侍女らに) これさ馬鹿が! お泣きでないよ。泣くことはありません。萬一にもわたしが、當然牢へ入るやうな罪を犯したのだと分りでもしたなら、其時にこそ、わたしの出て来る顔を見て、澤山お泣きなさい。今受ける此お處刑は、全くわたしの修行の爲です。…(王を見返つて) 我夫、さやうなら。わたくしは貴下のお後悔遊ばすのを曾ぞ望んだことはありませんんだが、今は、然う望まないわけには参りません。…(侍女に) 侍ども、おいで。お許しが出てゐる。

リオン さ、吩咐けた通りにしろ。退れ!

ハーマイオネ 警護されて入る。侍女も従いて入る。

甲貴 御前、お願ひ申し上げます、どうかお妃さまをお呼び戻し遊ばされますやう。

アンチ 尙書とお調べ遊ばしませんければ、甚しい御裁断ちがひが無いとも申されません。然る場合には、あなた様、お妃さま、王子さま、お三方さまの御不幸でございます。

甲貴 御前、お妃さまに限りましては、恐れながら、天帝に對せられても、御前に對せられましても、只今がた御非難遊ばされましたやうな、汚れた御所行なぞの、決してあらせられませぬことは、手前、一命に掛けて申し上げます。

アンチ 萬一にも不義の御所行が、實際あらせられましたならば、手前は、以後妻めを犬小屋に押込め、同接しまして、目で観、手で觸れてゐない限りは信じないことに致します。お妃にさへ然ういふことがあるやうでは、世界中の女の肉體は、只の一時も、只の一ドラムも信ぜられませんから。…

リオン やかましい!

甲貴 御前さま……

アンチ かやう申し上げますのは貴下のお爲でございます、わたくし共の爲ではございませぬ。貴下は慥かに憎むべき何者かに欺されてお在遊ばすのです。

其悪者をわたくしが存じてゐれば、すぐさまお國がまひを申し渡します。萬一にもお妃さまにお不埒がありましたなら……手前に二人の女がござ

います、長女は十一歳、二番目と三番目と九つと五つでございます……若しお不埒の證據が擧がりまますやうなら、彼等三人を以て其お償ひをいたし

ます、誓つて三人ながら不具者にいたします。不義の子を生む十四の春は見させませぬ。彼等は三人とも相續人なのでございますが、道なら

ん振舞をさせる位ならば、不具者にいたします。 リオン やめろ! だまれ!……汝等の臭い噂に對する感覺は、死人の鼻も同様だ

おれは(と肩をじつと押へて)斯うして汝等が觸覺を感じるのと同じ程度に、それをば見、それをば感じてゐるのだ。さうして其感じる媒介物(と肩を押へてゐる自分の手を見て)までも見てゐるのだ。

アンチ 若し果して然うでございますならば、もう清い人間を葬る墓場なんぞは要りませぬ。到底、此むさい、汚い地球上には、たつた一粒だつて清い人間なんぞは居ませぬのですから。

リオン え、では予の言ふことには信用がないのか?

甲貴 さア、此事件に關しましては。此お疑ひは總てお邪推であつた事に致したいと望んでをります、多少それが御前のお不名譽になりませうとも。

リオン えい、もう汝等と議論をしてゐる必要はない、堪忍の出來ん理由があるのだから、只それを實行すれば可いのだ。王の特權上、汝等に相談をしてゐるのぢやない、只好意で知らせてゐるのだ。それを呆れ顔をして、自然か故

意とかは知らんが、信ずることが出来んとか、信ずることを好まんとかいふなら、もう汝等の言ふことを聴く必要はない。此一件の利害も處分も予が一手で引受ける。

アンチ 御前、では、どうか、御前お一人で、窃かに御審問遊ばされますやうに、餘の者へは御内分に遊ばしますやうに。

リオシ そんなわけにはいかん！ 汝は齡を取つて甚しい物知らずになつたか、で無けりや生れ附きの阿呆だ。カミローの出奔といひ、平生からの奴等の親密さと言ひ、……それは只目で見ないだけで、目撃の證據がないだけで、最も明白を極めてゐた事だ、……そればかりでない、他の一切の事情までが、ちやんと揃つたから、それで此處分に及ぶんだ。けれども尙念の爲に……斯ういふ重大な事に粗忽があつてはならんから、……デルフォスのアポローの神宮へ、最も適任と誰れも思ふあのクリオミニーズとダイオンと

を急使として遣した。神託を承はつて、一切を決する答へを彼等が持歸る筈だ。其の神託次第で、おれの進退も決まるのだ。どうだ、正當な計らひだらうか？

甲貴 正當なお計らひでございます。

リオシ おれは安心してゐるから、今知つてゐる以上を知る必要はないのだが、事情に疎くつて信じかねてゐる彼れ（とアンチコーナスを見やつて）の如き者共を満足させるためには神託が必要なのだ。で、妃は、われらとは全く引離して幽閉しておくのが當然だと考へた、逃げた二人の響みに倣つて、どんな裏切をすまいものでもないから。さ、従つて來なさい。公然一同に言ひ聞かせることにする、誰れしもこれを聞いて怕慄しない筈はない。

アンチ (傍白) むしろ王を嘲笑するだらうと思ふ、眞實の事が分れば。

一同入る。

第二場 牢獄

アンチゴリナスの妻ポーライナと侍者役らと出る。

ポーラ (侍者の一人に) 牢守の役人を呼んでおくれ、わたしの何者だといふことを知らせておくれ。

侍者一人入る。

あゝ、お妃さま、歐羅巴中のどの御殿だつても貴女には不十分でございます。すのに、こんなあさましい牢屋の中にお在遊ばすとは!

前の侍者役、牢守の役人を伴れて出る。

(牢守に) お前さんわたしを知つてゐますか?

牢守 立派な奥さまとお見上げ申します。

ポーラ ちや、お妃さまの許へ案内して下さい。

牢守 それは御免を蒙ります。決して人にお會せ申してはならんといふ御嚴命でございます。

ポーラ ま、どうしたといふ騒ぎだらう、お貞淑なお妃さまをお見舞に來たわたしをさへも通さないといふのは! お侍女たちに會ふことは出来ますか? どなたかに? イミリヤさんには?

牢守 御家來衆をお拂ひ下さいますれば、イミリヤどのを伴れて参りませう。

ポーラ では、あの人を呼んで下さい。…(侍者らに) お前さんたちはお退りなさい。

侍者役ら入る。

牢守 それから、手前が、其お會談中、お立會してゐねばなりません。

ポーラ よろしい。どうぞ。

牢守入る。

汚くもない物を汚い物にするために何といふ騒ぎだらう！ 理不盡とも何とも言ひやうがない。

牢守侍女のイミリヤを伴れて又出る。

(イミリヤに) お傍仕へさん、お妃さまは如何遊ばしていらつしやいますの？

イミリ さア、あゝいふ高い御身分のお方が、斯うした目にお逢ひ遊ばした場合の御忍耐としては、あの以上はございますまい。曾ぞお覺え遊ばさないおびつくりとお歎きとで、ちつとお月足らずに御出産遊ばしました。

ホーラ お男子？

イミリ お姫さまです、かはゆらしい、お健かな、お丈夫さうな赤さんでいらつしやいます。で、お妃さまは大層お喜び遊ばしまして、わたしの氣の毒な囚人や、わたしもお前も何の罪も無いわねえとおつしやつて、ございます。

ホーラ 其通りですとも、全く。ほんと

に爲様がない、王は狂人のやうな、危険な、あぶないをなさるんだから！ 先づ其お子のことをお耳に入れなけりやならぬ。さうだ、是非とも。此役目は女が一等可い。わたしが勤めませう。此場合甘いことなんか言つてゐるやうなら、わたしの此舌は水ぶくれになつてしまへ、二度とふたゝび、眞赤になつて腹を立てた時の喇叭の役な



んかするな。…イミリヤさんどうぞお妃さまへ、わたくしが、精々御奉公
 仕りますと申し上げて下さい。若しわたしをお信じ遊ばして、其お小
 さいさまをお預け下さいますなら、わたしは必と王にお見せ申して、手強
 くお辯護を申し上げますよ。其お小さいさまを御覧になれば、お氣がど
 んなにか和ぐかも知らない。能辯が役に立たん場合にも、純な、無邪氣な
 沈黙が却つて相手を説き落すことがありますから。

イミリ
 奥さん、あなたのお立派なお人柄を信じない者はありますまいから、かゝり
 あひのない貴女が、さう遊ばして下さいますれば、きつと好い結果が生じ
 ませう。此大役は貴女より外に勤めるお方はありません。隣の室へいら
 しつて待つてゐて下さいますれば、わたくしは急ぐ此御親切をお妃さまへ
 お傳へ申します。お妃さまにも、つい今日、そんなやうなお考案をお立て
 遊ばしたやうでございましたが、拒絶られても何だからとおつしやつて、

まだどの大臣方へもお申し出ではなりませんでした。

ボーラ
 イミリヤさん、此舌の有ります限り、それをわたくしは用ひますとお傳へ
 申して下さい。若し舌には智慧が伴ひ、胸には勇氣が伴ふものなら、大丈
 夫、成功しませう。

イミリ
 どうか御成功遊ばしますやう！ ちや、わたくしは此事をお妃さまへ。
 どうぞ、もつと此方へ。

イミリヤ 入る。

奥さま、お妃さまがお小さいさまを貴女へお渡し遊ばしました場合に、こ
 こをお通し申しましては、後でどんなお咎めを受けるか分りません、お許
 しが無いのですから。

ボーラ
 心配なされるにや及びませぬ。其お子は、自然に御胎内に囚となつてお在
 遊ばしたのを、其同じ自然の大法の手續で放免におなり遊ばしたのだから

王のお怒りにも、又、假にお妃さまにお科があつたとしても、更にそれらに御關係はないのです。

牢守 なるほど。

ボ― 心配なさるな。わたしの名譽にかけて、決してお前さんの越度にならんやうにします。

二人とも入る。

第三場 リオンチーズの宮殿の一室

リオンチーズ、アンチゴラス、貴族ら及び侍者ら出る。

リオン (傍白) 夜晝とも少しも心が安まらん。……こんな風にしてゐるのは勇氣が

ないのだ。卑怯なのだ。……此事の原因さへ居なくなれば……其片割れはあの姦婦だ。あの女たらしの王めは、逆もおれの手が達かない、おれの智慧の規ひからも、的からも外れてゐる。彼奴は保険附だ。どうもならん。けれども女の方は予の心任せだ。彼女が死んだとする、焚殺してしまつたとする。幾らか心が安まるかも知れん。(侍者甲の近寄つたのを見て) 何だ?

甲 御前。

リオン 王子はどうした?

甲 今晚はよくお寝になりました。御不加減はお癒り遊ばしたやうに存ぜられます。

リオン 子供に似合はん立派な氣立だ! 母の不品行を聞くと、俄にしよげ返つてじつと思ひ込んだまゝで、自分の恥のやうに思つて、元氣も、食慾も、安眠

も失くしてしまつた。急に衰弱した。……(侍者に) 退つて可い。往つて尙様子を見て來い。(侍者甲入る。王は又何か考へてゐたが、暫くして) ……えい、馬鹿な! もう彼奴の事は何にも考へまい。彼奴へ復讐しようとする、却つて反撥つて來る。却つて苦痛だ。彼奴自身が強大である上に、強い身方を有つてゐる、強い同盟國を有つてゐる。あいつは、時機の來るまでは爲方がない。さしづめ、女めに復讐してくれう。カミローとポリクシニーズめ、笑つてゐやがれ。おれの憤慨するのを面白がつて見てゐやがれ。手が達きさへすりや、決して笑はしておくんぢやないのだ。まして手の裏に在るあの女めは。

ボーライナ 赤兒を抱いて出る。貴族の乙と侍者の甲とがそれを留めながら従つて出る。

貴乙

(ボーライナを止めて) 入つちやありません。

ボ一

いゝえ、どうぞ貴下がたも私しの後援者になつて下さい。貴下がたは、王の亂暴なお怒りばかり怖がつてゐて、お妃さまのお命の今にも危いのに氣が附きませんか? 何のお科もない、お貞淑な、邪推深い王さまとは似ても似つかぬ、あのお潔白なお妃さまの……

アンチ

(氣を揉んで逃つて) あゝ、もうよいゝ。

侍甲

夫人、王は昨晚御安眠遊ばさなだったのでございます、で、だれもお傍へ参つてはならん、と仰せ附けになりましたのでございます。

ボ一

まアさ、騒ぐには及びませんよ。わたしは、其御安眠を王へ献上を爲に参つたのです。お前さん方のやうなのが、とかく王のお傍へ影法師のやうに這ひ摺り寄つて、ほんの一寸でもお氣分がわるさうだといふと、餘計な溜息の合槌を打つ。お前さんがたのやうなのが御不眠の原因を養成へるのです。わたしは、苦い代りに良藥になることを、エーテルのやうな效能

のあることを申し上げに來たのです。御安眠の邪魔になるやうな毒氣を、一度期にお浄め申してしまふために來たのです。

リオン (ボーライナをきつと覗んで) やい、何をやかましくいふ?

ボ一 決してやかましくは申しません。御前さまのお爲に、お名づけ親の役目を勤めまする者の事に就きまして、必要な協議をしてをるのでございます。

リオン 何だと! ……え、其無禮な女をあつちへ引立てろ! アンチゴーナス、かねて彼女をよこしちやならんといつておいたちやないか? きつとやつて來をるだらうと思つた。

アンチ はい、さやう申し附けおいたのでございます。御不興を蒙るから、又手前の曲事になるから、決して推參してはならんと思し附けおいたのでございます。

リオン ちや、汝は妻を御し得ないのか?

ボ一 (遮つて) 不正な事をすれば、御し得ませう。けれども、御前と同じ方針を取りません以上は、正しいことをしたのを罪にして罰しません以上は、決してわたくしを御し得ません。

アンチ あ、あの通りでございます! 彼女が手綱を咬へたりといふと、もう爲様がありません、勝手に駈けさせておきます、けれども躓きもいたしません。

ボ一 御前さま(と突と王の前へ進んで、膝まついて) はい、参りました。どうぞお願ひをお聴き下さいまし、わたくしは貴下の忠臣でもあり、良醫でもあり、最も柔順な御相談役でもあると、自身で名宣りまするけれども、表面さう見えてゐる他の人達のやうに、御病氣を慕らせませうなことは決して致しませんから、或は不忠ともおぼしめしますでせう。はい、わたくしはお貞淑な

17 10

お妃さまのお使ひにまわりました。

リオン お貞淑なお妃だ！

ホー はい、お貞淑なお妃さま、はい、お貞淑な、と申しました。わたくしが男子であれば、お傍仕への、一等意氣地のない男子でありませうとも、男子でさへありましたなら、決闘をいたしましても、お妃さまのお貞淑だといふ明りを立てます。

リオン (激昂して) 此女をあつちへ追立てろ！

侍者ら立ちかゝらうとする。

ホー 目が潰れてもかまはないのなら、さ、わたしに手を掛けて御覽。……歸る時には自分で歸ります。お使ひを果さないうちは退りません。……(又王に對つて) お貞淑なお妃さまが、……いゝえ、お貞淑に相違ありません。……お姫さまをお儲けになりました。(と赤兒を見せて) こゝにいらつしやいます。お

祝福を下しおかれまますやうにとのお言葉でございます。

と赤兒を床の上に置く。

リオン え、退れ！ 魔女のが！ 此女を室外へ追ひ出してしまへ。おせつか

いな慶菴婆め！

ホー いゝえ、そんな者ぢやございません。さういふ事は、然うお呼び遊ばす貴下も御存じはないでせうが、わたくしも存じません。さうして、わたくしの正しい人間であります程度は、貴下が狂人めいてお在遊ばすのと粗同等だと申せば、世間へは、正しい人間だといふ意味に通用いたします。

リンダ (左右を睨んで) 謀叛人めら！ 汝等は彼女を何故突出さん？ 其私生兒を彼

女へ渡しツちまへ。……(アンチゴナスに) 此老翁爺め！ 汝は牝鷄に突かれて、蹶散らされて、埒から追出されてしまつてゐるのだ。……其私生兒を取りのけると言へば！ 其婆アにそれを渡せ。

アンチゴリーナス 餘儀なく、赤兒を抱き上げようとして近寄る。
 水一 永久に祟りを受けますぞ其手は、假にもそんな冤の汚名をお被せ申して、お姫さまに手を觸れなさんと！

アンチゴリーナス 躊躇する。

リオン (苦々しげに) 妻を怖つてゐる。

水一 貴下もお妃を怖いとおぼしめすと可いのです。さうですと、申すまでもなく、お兒さん方をみんな御自身のだとおつしやいませうから。

リオン (憤激して) どのいつもこいつも謀叛人ばかりだ！

アンチ いゝや、手前におきましては、決して謀叛人なぞではございません。

水一 わたくしとてもです。又、こゝに居ります者で、たつた一人ツきりの他は、決して謀叛人なんかぢやございません。其一人といふのは(と王を指さして貴族らに)あの方です。何故とおつしやい、あの方は、御自身の神聖な御名譽

も、お妃さまのをも、又、末頼もしい王子さまのをも、赤さまのをも、讒誣や悪口の手へお引渡しなさいませ、讒誣や悪口の鋒ほど鋭いものは世の中にございませぬのに。剩へ、どうしても、其間違ひ切つたお想念をお棄てなさいませぬ、けれどもそれを、上下の關係上、強ひてお棄てなさるやうにすることも出来ないといふは、何たる遺憾しいことぞせう！ 間違つてゐると分り切つてゐるのに！

リオン どこまで舌の根の續く婆アだ彼女は！ 夫を叩き附けておいて、こんどは予へ喰つてかゝつた！……此小びツちよは予のではない。ポリクシニーズが生ませたのだ。そつち、へ持つてつて、母親と一しよに火にくべてしまへ。

水一 いゝえ、貴下のお子です。子は親に似るといふのが事實なら、瓜二つといふほど貴下にお似なすつていらつしやるだけ、御運がわるいのです。御

寛なさい、諸卿型こそ小さけれ、何もかもお父さま寫し、目も、鼻も、唇も、八の字を寄せるお癖も、額附も、いゝえ、此回んだ願や此可愛らしい頬の唇までが、そつくり御前のお笑ひ顔、手の格好から、爪から、指先から、あゝ、もし造化の神さま、此お子を父御さまに如是にまで似せてお製作へなされたからは、お氣質も御隨意にお定めでございませうが、どうぞ、人を黄色く見る邪推嫉妬のお氣質だけは、どうぞ、父御さまにお似なさいませぬやうに！

リオン 悪黨婆アめ！ (アンチゴースを見返つて) 妻の口をさへも塞ぐことを能いしない鈍漢め！ 絞罪に相當する奴だ汝は！

アンチ 妻の制裁が出来んからといつて、悉く夫をお罰しになつた時分には、御家來がなくなつてしまひませう。

リオン (いよく激昂して) 改めて命ずる、其女を引立てろ！



ボ (冷然として) どんな不徳不倫な夫でも、たかゞ、それくらゐの事しか出来ませぬまいよ。

リオン (ますます怒つて) 焚りの刑に處するぞ！

ボ かまひませぬ。そんな火を燃やす者こそ邪宗門です、焚かれる當人が科人なのではありませぬ。わたくし自身は貴下を暴君とは申しますまい、けれども何の謂はれもなく、全くのお邪推からお妃

さまをお虐侍遊はすのですから、ついお暴虐と世上一般に申し觸らすやうになりました、お恥辱になりますのです。

リオン (貴族らに) 忠義を存じてゐるなら、其女を室外へ追拂つてしまへ！ おれが暴君なら、彼奴の命はとうに亡いのだ。暴君でないと思つてればこそ、あんな暴言を吐くんだ。彼女を引立てろ！

貴族ら ポーライナを室外へ去らしめようとする。

ボ-

(貴族らに) そんなにお突きなさるなよ。往きますよ。…御前、赤さんをお頼み申します。貴下のお子でございますから。…ジョーヴ神さま、どうぞもつと良いお守役をお送り下さいませやうに！ (貴族らに) 何の爲に手を掛けるのです？ 王の御不料簡を知りながら、どなたもく、そんなにやさしくばかりしてお在なさるといふと、却つて王のお身の毒になりますよ (貴族らがやゝ激しく立ちかゝるのではいく)。…さやうなら。もう歸ります。

ポーライナ 入る。

リオン

(アンチゴナスに) 謀叛人め、汝が教唆してさせたことに相違ない。…(赤兒を見て) おれの子だ？ え、持つてツちまへ！ 其奴を可愛いと思ふ汝自身、それを持つてゆけ、すぐに火にくべてしまへ。是非汝に命する、汝に、すぐに持つてけ。今すぐに、實行したといふ證據を持つて来い。さうせんと、汝は勿論、家内中、命が無いぞ。敢ておれの怒りに觸れる積りなら、否だと言へ。此私生兒の頭蓋骨は、おれがみづから、此手で以て粉微塵にしてくれる。さ、火の中へ持つてけ。汝が教唆したに相違ない。

アンチ

決して教唆はいたしません。それは同僚たる此人々が申し開いてくれることゝ存じます。

貴甲

其通りでございます。御前、アンチゴナスは、決して彼の婦人の推参いいたしましたことには關係はございません。

リオン 汝らは悉皆うそつきだ。

貴甲 (跪きて) 御前、どうぞわたくし共の申すことを御信用下さいませうやうに。わたくし共が常に忠勤を勵みますのをお認め遊ばされますやうに。かやうに跪いてお願い申し上げます、過去の、又將來のわたくし共の忠勤に面せさせられまして、其怖しい、お残酷な御趣意を御断念遊ばしますやう、それは必ず不祥な結果と相成るに相違ございませんから。一同跪いてお願い申し上げます。

貴族ら一同跪く。

リオン (決して半獨語のやうに) おれは、風のまゝになる鳥の羽か? ……此私生兒めが大きくなつて、足元へ来て、膝まづいて「お父さま!」と言ひをるのを、それを見ることが出来るか! いや、その時になつて呪ふよりは、今焚殺してしまつたほうが優だ。が、ま、生かしておかう。いや、生かしち

やおかれぬ。…(アンチゴースに) おい、お前さん、ちよつと爰へ。…お前さんは、あの産婆どのと、あの取上げ婆アさんと一しよに、此私生兒の、儘かに私生兒だ、おれの此髪が儘かに灰色であるやうに…此私生兒の命を助けようとして、大層苦勞をしてくれた次第だつたが、(皮肉に) 此上、此奴を救ふために、どのくらゐのことをしてくれる氣だね?

アンチ どんなことでもいたします、手前の力に及びます限りは、又不名譽な儀でございませぬ限りは、少くともこれだけは。すなはち、此無邪氣なお方をお救ひ申す爲にならば、聊か残りをります此鮮血を質物とも致します。出來ますことならば、何でも。

リオン 勿論、出來ることだ、では、此劍に掛けて、命令通りにすると誓言しろ。

アンチ 誓言いたします。

禮なことを言つた汝の妻も、一旦は赦しておいたが、二人とも命がないぞ。汝は子の臣だから申し附ける、此女の私生兒を提げて、遠く我領分を離れた何處かの荒地まで持つて行つて、そこへ捨て、來い、雨露風雪の爲るがまゝにして、自ら守らす以外には、決して慈悲を施すことはならんぞ。奇怪な運命で生れた奴である以上、死ぬも育つも運命に一任するやうに處分するのが當然だ。命令通りに行はんと、汝の靈魂は不忠の咎めを蒙る、又汝の肉體は、厳しい苛責を免れんぞ。それを取り上げる。

アンチ 誓つてお命令通りにいたします、今死ぬはうが寧ろお慈悲だと心得ましても、……さア、お氣の毒な赤さま。(と抱き上げながら)あゝ、どこかの強大な精靈さまが、鷹や鴉に教へて、お前さまを養育ませて下さりますやうに！ 狼や熊さへも其残忍な性を捨て、慈悲深い業をしたとかいふが、……(王に)どうか此御所行には拘らず、お幸福でいらせられますやうに！ (赤兒に)

さうして、棄てられなされたお可哀さうなお前さんの傍には、どうか此酷いお爲むけとは反對の天のお恵みの豊かでありますやう！

アンチゴリナス 赤兒を抱いて入る。

リオン (獨語のやうに) いゝや、他人の兒なんぞは育てない。
侍者一人出る。

侍者 申し上げます、御託宣を承はりの爲お遣しになりましたお使者達からの早飛脚が、一時間ほど前に、到着いたしました。尙クリオミニーズ並びにダイオンに於きましても、デルフォスから安着いたし、既に上陸の上、お膝元へと急ぎをります。

貴甲 憚りながら、前例のない早さでございました。

リオン ちようど二十三日目だ。大層早かつた。つまり、アポロー明神が一日も早く事實を明かにしようと思し召されるからであらう。諸卿たち、では

直さま準備をして、裁判庭を開くやうにしてくれ、不貞極まるあの女を私
 間に及ぶから。既に公然に弾劾した以上、公然に裁判するのが當然だ。
 彼女が生きてゐる間は、此胸がおれの重荷だ。……退れ。只今吩咐けたこ
 とを熟く考へてくれ。

一同入る。

*

*

*

*

*

*

第三幕

第一場 シ、リヤの一港

リオンチーズ王の使臣クオオミニーズとダイオンと出る。

クリオ 氣候はよし、空気がよし、島は豊饒、又御神殿は、世間の噂以上に立派なも
 のでした。

ダイオ 自分はこの祭祠服……たしか然う呼んでましたな……あの祭祠服の立派
 なのと、あの恭しい神官達の厳格な立振舞を土産話にします、あれが一

等自分を驚かしましたから。おゝ、あの犠牲！ どうも莊重で、嚴肅で、

悉く人間界の事とは思はれんやうな儀式でしたなア！

クリオ 就中、あの御詫言には一驚を吃しました、所謂ジョーヴ明神の雷霆かとも思

ふやうなあの耳を聳する大音聲！ 手前は惘然となつてしまつた。

ダイオ 若し此お使ひの結果が……とにかく、不思議に神速に、愉快に、事が運んだ

のでしたが、……若しこれが幸ひにお妃のお爲にもなるやうですと、……

あゝどうか然うしたいものだが！……費した時間は決して空にはなりません。

せん。

クリオ アポロー明神、何卒萬事を首尾よく！……無理にハーマイオネさまに汚

名をお被せなされるとしか思はれん此度の御宣告は、甚だ好ましくありま

せんなア。

ダイオ 此短兵急なお糾問で、いづれどうにか決るでせう。つまり、斯様に（と携へ

てある封書へこなしをして）アポロー明神の神官が封印をいたした此御詫言が開封される場合には、其時こそは、何か知ら、意外な事が出来するでせう。……（下手へ對つて）おい、乗換の馬を！……どうかめでたく収りますやう！

二人とも入る。

第二場 裁判廷

リオンチーズ、貴族ら及び役人ら出る。

リオン 此裁判廷を開くのはあさましい次第で、不本意千萬なことである。糾問するべき者は一國王の女ともある我妻であつて、非常に親愛してゐた女である。暴虐だといふ非難の無いやうにするために、かく公然と審判する

ことにした以上、當然の手續を踏んで、有罪か無罪かを決しなければならん。科人を伴れて參れ。

役人 國王殿下の御意でございます、お妃には御自身法廷へ御出頭遊ばされませう。シイツ！

ハーマイオネ、警護されて出る。ボーライナ及び侍女ら従いて出る。

リオン 弾劾状を讀み上げろ。

役人 (讀む)

「シ、リヤ王リオンチーズ殿下の妃ハーマイオネを大叛逆罪の故に彈劾す。汝ハーマイオネは、ボヘミヤ王ボルクシニーズと姦通に及びたるさへあるに、カミローと共謀して其夫王たる我大君を失ひ奉らんと企て、其事殆ど露顯せんとするや、彼等を安全ならしめんために、眞の臣下

たるの盟約に悖り、彼等を教へ助けて、夜間に遁走せしめたる條、大叛逆罪に相當する故に彈劾す。」

ハーマ (おちつきて) 自分の申すことは、必然に其彈劾箇條とは反對でもあり、又、此方の證據といつては、自分自身で申し立てることの外には何一つないのですから、「覚えがない」と申して見たとて、おそらく何の役にも立ちますまい。既に正直を不正直とお見做しあつた以上、すべて自分の申し立てることは虚偽とも思しめすであります。けれども一通り……若し神々が果して人間の行動を御照覽遊ばすものならば、いかな無道も、暴虐も、これは冤の忍苦だといふことに心附いて、恥ぢ怕れるに相違ありません。……我夫、あなたこそ最もよく御存じの筈です、御存じでないかのやうにお見え遊ばしますけれど、わたくしの過去が貞潔で、清浄で、誠實でありましたとを。それは、わたくしの今の此不幸が確實であると同じに確實です。

わたくしの今の身の上は、俗衆の心を悦ばすために作り設けられた史劇
 などにも例のない程の不幸です。何故ならば、ま、御覽遊ばせ、わたくし
 を。王座を分ける妃ともある身が、一大國王の女とも、未來の大君の母で
 もある者が、かうして爰に突立つて、だれが見ようとも、聞かうとも關はず、
 名譽と生命との爲に、申開きをしてをりますのを！ 生命には、悲痛同様
 に重きをおきませんから、敢て棄てるのをも厭ひませんが、名譽は我子の
 身の上にも及びますから、是非とも明りを立てなければなりません。……
 あなた、わたくしは貴下のお良心に訴へます、ポリクシニーズどのが來朝
 せられた以前までは、わたくしは正當に御恩愛を蒙つてゐたではございま
 せんか？ 彼の人が見えられて以後、かやうにお呼出しを受けませんけれ
 ばならんやうな、どういふ不埒な心易立をわたくしが彼の人に對していた
 しましたか？ 若し聊かでも名譽の範圍外に亙るやうな事を、行爲でな

意中でなり、假にも致しましたのなら、こゝに列座の人達の心は悉く石
 ともなるがよい！ 最も近い肉親までが、わたくしが死んだ後に、其墓
 石までも侮辱するがよい！
 リオン 酷いことをする位ゐの奴は、した後で、鐵面皮に、覺えがないと言ひ張るの
 は定りだ。
 ハーマ 成程さうです、けれどもそれはわたくしには適合りません。
 リオン 自分の事ではないといふのか？
 ハーマ ついたした過失なぞならば知らぬこと、それ以上のお咎めを受ける覺えはご
 ざいませぬ。ポリクシニーズどのに對して、御嫌疑を受けましたけれど
 も、わたくしは、天下晴れて、正當に王妃たる者が爲てよいだけのことをい
 たしたのです。貴下が然うせよとお命じになりましたのですから、其通
 りに致さなければ、貴下に對しては不柔順、御親友に對しては、御幼少から

の、又とない、莫逆の御親友たるお方に對しては、不信義になるとたと然
 う心得ましたので、命通りの好意深切を盡しましたに過ぎません。それ
 から、陰謀とやらの事は、それは如何いふことか、わたくしには解りませ
 ん。たとひ面前へそれをお提出しになりましたしても、恐らく解りかねませ
 う。わたくしの存じてゐる限りでは、カミローは正直者でございました。
 なにゆる朝廷を去りましたか、神々と雖も、或はわたくし同様、御存じない
 かも知れません。

リオン 其方が彼れの出奔を存じてをらん筈はない、彼れの居らんとここで爲たこと
 をば存じてをる通りに。

ハーマ あなた、……(と王の顔をじつと見上げて)何をおつしやるのか、わたくしには解
 りません。けれども、空なお疑念の的となりました以上、わたくしは命を
 捨てるのは厭ひません。

リオン 空な疑念だ？ 現に行つてゐるのだ其方が。ポリクシニーズの子を生ん
 だのを空な疑念とは何だ！ 其方は、他の同罪者と同様、破廉恥至極の女
 だ、不貞不實の、いや、それを否定したいでもあらうが、無効だ。最早、其
 方の生んだあの小びつちよは、だれも父親になる者はないから、父なし子
 らしく、既に放棄させてしまつた、其方にこそ罪はあれ、彼れには罪はない
 のだが。此上は裁決に伏罪しろ、最も軽い處分でも、死刑以下では無いと
 思へ。

ハーマ (しづかに) 其威し言葉は御無用です。それで威さうとおぼしめす其死刑を
 わたくしは待つてゐます。わたくしに取つては、命は大切な物ではありません。
 ません。一生の、此上もない慰樂であつた貴下の御恩愛をもう失くして
 しまつたのだと存じますから……失くしてしまつたやうに存じますから、
 如何してだか存じませぬけれど。又、わたくしの第二の樂みは、此體から

生れた初の子のあの王子です、其王子に、此身が悪い疫にでも罹つてゐるかのやうに、逢ふことをさへ禁ぜられました。又第三の慰めとも思つてゐた者は、一等不運に生れついて、此胸元から抜き取られて、頑固な口の中に乳汁をまだ含んだまゝ、最期の場所へと伴れて行かれました。此身はまた、不當の憎しみを受けて、辻々の高札に淫婦と宣告され、どんな女にさへも許される産褥の特権をさへ否まれ、最後に、こゝへ、此法廷へ、まだ十分には日だゝん病軀を、白晝の目目に曝して、引立てられました。……もし、あなた、考へて御覽じませ、尙生てゐたいといふ未練な心が起りませうか死ぬのを恐れるやうな？ ですから、さ、御處分遊ばせ。けれども、もう一言だけ申しませう。誤解遊ばすな、命は棄しへほどにも思つてとりません、けれども名だけは清うしておきたいと存じます。……若しか貴下のお邪推以外に、何等の證據もなくつて、わたくしを死刑にお處しにな

るのでありますならば、それは全くの殘虐で、政道ではないと申しておきます。……(貴族らに)諸卿たち、わたしは御神託に訴へます。アポロー明神の御裁判を乞ひます！

貴甲 その御要求は御道理千萬と存じます。……(役人に)アポロー明神のお諭宣をこれへ奉體して參るやうに申せ。

役人 數人 入る。

ハイマ (驚息して)わたしの父は露西亞の帝であつた。おゝ、父上が御存生で、實女が此様に審判されてゐるのを御覽遊ばして下されたなら！ 只一目、此あさましさを、お怒りの復讐のお目ではなく、お慈愛の目で、惘然だと御覽じて下されたなら！

役人ら クリオミニーズとダイオンとを伴れて出る。

役人 御兩所とも、此正義公道の御劍に懸けて、此處にて御誓言をなさい、クリオ

ミヒーズどもの、ダイオンどもの、共にデルフォスに参着の上、アポロー明神の神官の手より、斯様に密封したる御託宣を受取つて歸路に就かれ、其後かりそめにも此神聖なる御封印を開き、若しくは其秘密の御内容を窺ひ讀む等の儀は、曾て無之かつたといふことを御誓言なさい。

クリオ
ダイオ
其通り、一々、誓言いたします。

リオン
開封して讀み上げろ。

役人
(讀む)。

「アポローイオネは貞潔なり。ポリクシニーズに罪責なし。カミローは忠臣なり。リオンチーズは猜疑心深き暴君なり。頑是なき嬰兒は正しく王の子たり。されば、捨てたる其兒にして發見せられざらん歎、王は其嗣を絶たん。」

貴族
おゝ、ありがたいアポロー明神の御託宣！

ヘーマ
まア、あらたかな！

リオン
(役人らに)讀みちがへたのぢやないか？

役人
讀みちがへは致しません。ここに認めてある通りでございます。

跪いて王に託宣書を見せる。

リオン
其神託は悉く間違つてゐる。かまはず裁判をつゞけろ。そりや悉皆うそだ。

一從者役兼いで出る。

役者
王さまへ申し上げます。王さま、王さま！

リオン
どうしたのだ？

從者
おゝ御前さま、申し上げましたら、きつとお憎しみを蒙るでございませう！王子がお薨れ遊ばしました、お妃さまのお身の上をお案じ遊ばしました餘りに。



リオン え！ 亡くなつた？

従者 お亡くなり遊ばしましてござい
ます。

リオン アポローが逆鱗なされた。神
たちがおれの不正行爲をお罰し
なさるのだ！

此うちハーマイオネ閣
絶する。ポライナは
じめ皆々驚き、かけ
よりて介抱する。

や！ どうしたのだそれは！

ポライ (介抱しながら) 今のお知らせはお

妃さまのお命取です。(王に) 御覽なさい、死の神が何をしてゐるかを。

リオン あつちへ伴れて行け。感動し過ぎたのだ。生返るだらう。予はあん
まり自分の疑ひを信じ過ぎた。どうかして蘇生させるやうに、精々い
たわつてくれ。

ポライナ 及び侍女らハーマイオネを介抱しつゝ入る。

(天に對つて) アポロー 明神 御託宣を輕んじました大冒瀆罪を何卒お赦し下
され！ (貴族らに) おれはポリクシニーズと仲直りをしよう。改めて妃
に真情を語つて、元の通り妻としよう、あの善良なカミローをも呼返さう。
あれは儘かに誠實な、慈悲ぶかい者に相違ない。おれが嫉妬と邪推で本心
を失つて、残忍な復讐をしようと思つて、親友のポリクシニーズを毒害す
る役を彼れに命じた時に、……あゝ、あの時、若し彼の善良なカミローが性
急な予を制へなかつたなら、實行してしまつたのだ、……が、あれがどう

しても聴かない、おれが、それをすれば褒美をやる、でなければ死刑だぞ、と威したり賺したりしたけれど。彼れは慈悲深くもあり、廉恥心も強いから、おれの陰謀をポリクシニーズに打明けた、國をも家をも棄てた、知つての如く中々の財産があるのに。さうして只ひとへに紳士たるの面目を保つたために、一身を限りない冒険に委ねることにしたのだ。あゝ、おれが偽だらけであるので、彼れの光り輝くのが目に立つ！ 彼れの行ひが清らかなので、おれの行ひがいよいよ穢く見える！

ボーライナ 悲み 聞えながら、また出る。

水一 あゝ、かなしやく！ おゝ、早く此胸飾を切つて下さい、心の臓が寸裂れさうだ。レースも何もかも寸裂れさうだ！
 費甲 え、どうしたのです？
 水一 (主に) さ、暴君どの、どんな新工夫の責道具でも持つておいでなさい。車

裂でも、拷問臺でも、焚刑でも、皮剥でも、釜茹でも、鉛でも、油煎りでも！ さ、どんな古い、新しい拷問苛責にでもお掛けなさい！ これからわたしに並べ立てる悪態は、きつとお前さんを怒らせて、ひどい怖ろしい復讐をしようと思はせるに相違ないから。暴虐な上にかて、加へた邪推嫉妬、子供、考だとしても、九歳の女の子の考だとしても、淺薄な馬鹿々々しいお前さんの邪推が原で、ま、どんな事が起つたかを考へて御覽なさい！ さうして、それがだんくんに暮つた結果、とうく、どんな狂氣沙汰とも何とも言ひやうのない始末になつたかを考へて御覽なさい！ 何故とお言ひなさい。今までのお前さんの阿呆沙汰は、まだしも徒の狂氣じみてゐた位のものでした。ポリクシニーズさまを裏切なすつたぐらゐは、まだしも何でもなかつたのです。それは只貴下の、馬鹿で、不實で、おそろしく不信不義な人だといふことを示しただけでした。それからカミロー

の心に毒を注ぎ込んで、一國王たる身分の方を殺させようとなすつたのも
 まだ大悪事ぢやなかつたのです。もつと酷いのがあつて見ると、それは
 小罪悪なのです。同じくまた、赤さまを鴉の餌食になすつたのをも、ま
 ア、大した罪悪ぢやないとします、地獄の火の池に沈んでゐる悪魔だつて、
 それを聞いたたら、涙を出すかも知れないほどのおいたわしいことですね
 ども。それからお幼い王子さまのお亡くなりになつたのをも、わたしは強
 ちお前さんの罪にはしません、お齡まさりのお立派なお心から、馬鹿アな
 お父さまが貞女のお母さまに汚名を負はせなされたのを苦に病んで、お亡
 くなり遊ばしたとは言ふものゝ。……けれどもこれだけは……お、皆さ
 んがた、わたしが今申してしまつたら、泣いて下さい、お、く！と泣い
 て下さい、お妃さまは、お妃さまは、あのおいとしい、あのおなつかし
 いお方さまは、お亡くなり遊ばしてしまひました。しかも其お方を殺した

者には、まだ天罰が下らないのです！

貴甲

七里結界！ とんでもないことを！

水一

いゝえ、全くです。誓言いたします。誓言がお役に立たなければ、御自身
 で、往つて御覽なさい。貴下がたの力で、お唇に色が、お目に光りが戻る
 やうなら、お息が少しでも、お温みが些少でも出るやうなら、わたしは以後
 貴下がたに、神さまに御奉公するやうにして、お仕へします。……

此間リオンチーズいろくに燦爛する。それをボーライナ見て

お、そこにある暴君さん！ 今更後悔したつても無駄です！ お前さん
 の大罪悪は、今更千萬たら後悔なすつたからつて、どうすることも出来や
 しない。絶望より外になさることはありません。始終雪あらしのする荒
 山の中で、數十人の者が赤裸體で、斷食をして、膝を突いて、千萬年もぶツ
 通して祈つたからつて、お前さんの居なさる方へは、かりにも神さまがお目

をさへもお向けなさりアしますまいよ!

リオン (額をおさへて煩悶しながら) 言つてくれ、言つてくれ。いくら言はれても足らんくらゐだ。みんなが目を揃へて、どんなにおれを罵倒しても當然なんだ。

貴甲 (ゴライナに) もうお止めなさい。事の是非はどうありませうとも、王に對して、あまりといへば、御無禮でございますぞ。

このうちゴライナも漸くおちつく。

ボ一 すみませんでした。わるかつたと氣が附きますと、いつでも後悔いたします。あゝ、女心の向う見ずから、申し過ごしました。(王を見て) 大層お後悔ばしてのやうです。……(王に對ひて) 過ぎ去つた事で、もう如何もしやうのないとは、歎いたとても效はございません。わたくしがあゝ申したからつて、御無禮遊ばしますな。どうぞ寧ろわたくしをお罰し遊ばし

て下さいませ、お忘れ遊ばすべきことをばお思ひ出させ申しました罪で。もし、御前さま、あなた、大君さま、馬鹿アな女をお教し下さいませ。ついその、お妃さまを思ひまする餘り、あら、また馬鹿が! もうお妃さまの事は申しません、お子さまがたの事も申しません。わたくしの夫の事も、もう亡いものと存じて、もう何にも申しません。おこらへ遊ばしませ。わたくしはもう何にも申しません。

リオン 専ら眞實の事を言つてくれた時の方が可い。おのしに憫まれるよりは、あの方がすつと有りがたい。どうぞおれを、妃や王子の死骸の傍へ伴れでいつてくれ。二人を一つ墓へ埋葬めよう。二人が死んだ所以を墓石に誌して、おれの恥を後世までも傳へよう。日に一度づゝ其墓地の聖堂へ參詣することにして、涙を手向けるのをばおれの樂みにしよう。此體が其行を續けるに堪へる間は、誓つてそれを毎日の勤にする。さ、その悲し

いものゝ在る處へ案内してくれ。

皆々入る。

第三場 ボヘミヤ 海邊の荒地

幼児を抱いてゐるアンチゴラスと一水夫と出る。

アンチ では、船は大丈夫、ボヘミヤの荒地へ着いたのだな？

水夫 へい、さやうでございます。どうやらわるい時に上陸しました。空模様
が凄くなつて、今にも暴風がやつて来さうです。てまへどもが斯んなこ
とをしようとしてるんで、天道さまが酷く腹を立ててゐなさるんぢやない
かと存じます。

アンチ あゝ、御神慮のまに〜！…さ、汝は船へ歸つて、氣をつけてゐてくれ、

おれも程なく歸るから。

水夫 急いでなさいまし、あんまり遠方へおいでなさいますな。ひどい天氣に
なりさうです。それにこゝいらは猛獸が接んでるので有名ですから。

アンチ ゆけ〜。すぐ後から行くから。

水夫 (水夫獨語のやうに) いやな用をしなくつて済んで、まアよかつた。

水夫入る。

アンチ (赤兒に對つて) さア〜、可哀さうな赤ん坊さん、…死人の靈魂が迷つて
出るといふことは、豫て聞いてはわたが、信じちやゐなかつたが、果してあ
ることだとすると、…お前さんのお母さんが昨夜出て見えた、…あん
な現も同然の夢があらう筈はない。或時は右へ、或時は左へ首をうなだ
れた一人の女が、たしかにわたしの枕元へやつて来た。あんなに悲しさ

うに涙を一ばいに目に溜めてゐながら、見苦しくない様子をしてゐる女は曾ぞ見たことがない。雪のやうに白い服を着て、まるで天人のやうな風で、わたしの寢所へやつて来て、三度會釋をして、何か言ひさうにして、喘ぐかと思ふと、忽ち目が二つの噴泉になつたが、一類り泣いてしまふと、やがて斯ういふことを言つた。「アンチゴトナスどの、前世の約束で、誓約上止むを得ず、お前さんが、わたしの不幸な水兒を棄てる役をお勤めなさるのなら、ボヘミヤにも幾らも人里を離れた處がある、そこへ往つて、泣き叫ぶ其兒をば棄て、おいでなさい。其子は助からんものと思ひますから、名をバーデイタと(ごき人)附けます。我君の吩咐とは言へ、こんな酷い御用を勤めた報いで、お前はもう決して女房のポトライナに逢ふことは出来ませんぞ!」と言つたかと思つたら、キヤーツといふ聲と共に消えてしまつた。びつくりして、やつと我に返つて、考へて、こりや夢ではなかつた

と思つた。夢はたはいもないものだが、あれだけは、十分信じて守らんければならんやうに思ふ。……きつと、ハーマイオネさまはお處刑にお逢ひなすつたのだ。で、アポロト明神が、これは全くボルクシニーズ王のお胤なんだから、こゝへ棄てろとお命じになるのだらう、助からうと、助かるまいと、こゝが其實のお父さんのお國なんだから。……(小兒を地上へおろしながら)みどり兒さん、御機嫌よう! さ、こゝへ戻さつしやい。こゝへ書いたものを。こゝへは此れと此れを。(と衣服や金子の容れてある包みをよき處に置くおきて)若し御運がよければ、これらの品々が、行末長くお前さんのお役に立ちます。……

このうちだんくにあらしだつて来る。

あゝ、あらしになつて来た。可哀さうなおちびさん、母御の不心得から棄子にされて、末はどうなることやら! 泣くことは出来んけれど、胸は張

裂けるやうだ。盟約のために、こんな御用をさせられるとは、あゝ何たるこつた！……(赤見に)さやうなら！(と空を仰いで)だんく空模様がおそろしくなる。……あゝ定めし亂暴な、怖い子守唄を聴きなさることだらう。……こんなに天が薄暗い晝は見たことがない……

奥にて多勢の叫び聲がする。

や、激しい叫び聲が聞える！……こりや急いで船へ歸らなくちやならん！……(と言ひつゝふつと一方を見て、驚き)ありや猛獸だ！……あゝもう助かりさうにない。

と逃げかける。熊出る。アシチゴリーナス其熊に追はれて入る。

やがて其反對の方より、牧羊者の親爺六十歳ぐらゐ出る。

観音

十歳から二十三までの間の齡でものは、まるッきし無かつたら可いだらうに、で無けれア其間は、若い者が眠てゐると可いんだ。あの齡べいの

間てものは、老人を困らせたり、盗イしたり、喧嘩アしたりするより外に、何一つ能はねいだ。……(奥の物音に聞耳を立て)あ、あれだ！十九から二十

二までの向う見ずの唐變木でなくッて、此天氣に、だれが獵なんかするものか？おらの大切の羊を二疋まで威しておッ走らせてしまやアがつた。

主人が目附ける前に、狼に目附つてしまひさうだ。若しまだうろついてゐやがるとすると、濱だらう、鳶でも喰つてゐやがるだらう。……(ふと包みに

目をつけて)やー！お好連さまかな！何だか落ッこちてるだな？はれま

赤んぼだ！可愛らしい赤んぼだ！男の子か、女の子か知らん？好い

子だ、可愛い子だ。可哀さうだ、拾つてやるべい。だが、ま、倅が来るまで

待つてゐべい。つい今しがた呼ばつたッけ。……(と奥へ向いて)おゝい！ほ

と呼ぶ。一方より此牧羊者の息子、(道化方)次の如く呼び



ながら、やがて
力なげな、ほん
やりした顔を
して、出る。

伴 ほうい！おゝい！

舞臺 あれ、そんな近いとこにゐ

たゝか？ 死んで腐ツちま

まふ時分の記念話に爲る物

が見たいだら、早うこゝへ

來う。……(垂れてゐる息子の顔

を見て)これ、どうした？

伴 (奮力なげに) おれ今日二つ偉

い物見たゝよ、海と陸とを以て！ だけんど、海たア言へねいだ、空と密接
いちまつたゝから。蒼天と海との間に、おめへ、針一本突込む隙もねいだ
からね。

舞臺 そりや、ま、どうしてだ？

伴 父さま、おめへに見せたかつたゝ、どえらい荒れたつたぜい、濱へおツかぶ

さつて來たゝ！ だけんど、それが勘文ちやアねい。可哀さうな、其人達

のわめき聲てつたら！ 見えたかと思ふと、見えなくなるだ。まるでお

ツ月さんを大帆柱で以て突貫すか思ふやうに、其船が持上るだ。か思ふ

と、四斗櫓中へ怪ウ投り込んだやうに、船が泡中へ呑込まれツちまふだ、

それから又、陸の方ちやア、肩骨荒熊に喰ひ裂かれてね、助けてくれい！

わめいて、おれ貴族で、名アンチゴーナヌいふもんだがいつて、名宣つて

だがまア、船の方かたづけることに爲るだが、……其海中へ、まるごと

呑込まれッちまつた時の様でものァ！……けんど、第一その、可哀さうな
人達の哭叫く聲でものァ！ それを又海めが馬鹿に爲るだ……それから
その、可哀さうな紳士の唸り聲だ！ それを又熊めが馬鹿に爲るだ。紳
士の聲と熊の聲とで、浪の音も風の音も聞えねいくれぬだつた。

観客

やれ〜！ そりやまアいつ頃のことだ？

伴

つい今しがた。それ見てから、まんだ瞬きもしねいくれぬだ。水に浸
つた人たちがまだ冷ッこくはなりきるめいだよ。熊もまだあの紳士ア喰
ひきりやしめい。今喰つてる最中だんべい。

観客

あ、おれが近所にゐたら、其紳士ア助けてやつたものを！

伴

いつそ船の近所にて、あれを助けてやつてくれ、アよかつた。が、海
中と来ちやア、おめへの折角の善根も、足の着けやうがなかつた。

観客

あ、なさけねいこんだ！ なさけねいこんだ！……だが、こら、こ

れを見ろ。さ、お感謝さま言ふだ。おのしア死にかゝつてる物に逢つた
いが、おらア生れたばかりの者に逢つた。こら、こんな立派な物があら
ア。見ろ、お歴々のお子さんの産衣だ！ こら、見ろ。手に取るだ、手に。
開けて見ろよ……(伴包みを取り上げる)……かうつと……おらア餘程前方
から噂アされてゐた、魔物から福ウ授かるツて。こりや必定魔物隠し
に逢つた子だ……開けて見ろよ。中に何があるだか？

此うち伴氣味わるさうに包みを開ける。

伴

父さま、おめへ、どえらい物持になつた。若い時分の悪いことが帳消
になりせへすりや、これからは幸福つゞきだんべい……金だ！ みんな
金だ！

観客

やい、こりや魔物の金ちふだ。だから、人に見られると無効だ。早く收ろ
おッ隠しッちまふだ。さ、宅イ往かう、近道から……やい、こちとらは運

が好いんだ。けんど人に知られたらもう無効だぞ。羊なんか如何でもい。さ、さ、近道から宅イ往かう。

おめへ、其拾ひ物持つて、近道から往かつせいよ。おらア、熊めがもう去ツちまつたか如何だか、あの紳士アどら程喰つたか、見て来べい。奴らは、飢じがつてる時でせへなきや荒いこと爲ねいだから。幾らか死骸が残つてたら埋めてやるべい。

そりや功德だ。何か残つてるもんで、其人の素姓が分るやうだつたら、おらもそこへ伴れてつてくんろ。

うん、さうしべい。さうしておめへに埋める手傳ひをして貰はう。けふは吉日だ。かういふ日にア何か功德をしべいよ。

親子ともに入る。



第四幕

序詞

「時」の說明役の資格で、一種象徴的の扮装をして出る。

時

或人達をば樂ませ、あらゆる人々をば試練し、善人の爲には喜びとなり、悪人の爲には恐れとなり、乃至いろくの間違を結び出したり、解除したりいたしまする手前は、これより「時」と名宣りまして、飛行を始めます。約十六年間にするり滑りぬけて、其廣い間隙内に起つた事は、一切沙汰な

しにしておきますのをば、どうぞ速過ぎるなぞとお叱りのないやうに願ひます。ある法律をひっくりかへすと同時に、ある習慣を植ゑ附け若しくは覆すのは、常に手前の権力内に在ることですから。手前は、最も古い制度が行はれてゐた頃乃至最も新しいそれが行はれはじめた頃の手前と同一のものだとおぼしめして下さい。手前は其最も古い制度の始めて出来た時分の目撃者ですが、今現に行はれてゐる最も新しいそれに對しても、同じく目撃者です。さうして今現にびかくしてゐる其新しい物をもやがて燻んだものにしてしまひます、其以前の物を微臭くしてしまつたやうに。右、御許容下されます以上、手前は、砂皿を轉じまして、さながら御一睡遊ばしましたかの如く、光景を大發展せしめて御覽に入れます。すなはち、彼のリオンチーズは、其後其愚かな邪推の結果を歎き悲むの餘り、ひたすら室内に閉籠りをるものといたしておいて、御見物の諸君、手前は目

下ホヘミヤ國內へ參つてをるものとお想像下されたい。さうして嘗て王にお子があると申したのをお思ひ出しを願ひます。そのお方を只今はフロリゼルドのと呼びます。又同じく急いで、今は駭くべきほど美しくおなりなされた亡人姫の事をお知らせします。將來姫の身の上に如何いふことが起るかは豫言したくありません。それは「時」が御報道いたすまゝにお任せおきを願ひます。……牧羊者の女たる彼の姫君に如何いふことが附屬してをり、如何いふことが出来るかは、全く「時」の問題でございませす。この儀を御賛成下さいませ、若し今まではつまらなく「時」を費してゐたとおぼしめますなら。但し今までに然ういふ御経験があらツしやらねば、つまらないお暇つぶしなどは決しておさせ申さないと「時」自身が申しおきます。(必ず面白いものを御覽に入れます。)

第一場 ボヘミヤ ボリクシニーズ宮殿の一室

ボリクシニーズ王とカミローと出る。二人とも十六年の風雪を経たために、前幕での容貌とは、ずつと老けて見える。王はカミローを國師のやうに優待してゐるのである。

ボリク カミローどの、どうかもう強願んで下さるな。何事でもお前さんに否だといふのは實に辛い。と言つて、承諾するのは死ぬ苦みだ。

カミロ 國を出ましてから、もう十六年になります。手前は、大抵外國で暮してゐたとは申せ、骨は故郷に埋めたいと存じます。それに、主君のシ、リヤ王が後悔せられました、手前をお呼迎へでございませす。手前が參れば、其御痛歎の多少お慰めとも相成りませうかと、僭越ながら存じます。それも

切つてお暇を願ひます一つの理由でございます。

ボリク カミロー、わたしを愛してくれられるなら、今更わたしを捨てるのは、従来のお前さんの忠勤を拭ひ消してしまふのだ。お前さんの忠良を知つてからは、お前さんはわたしには無くてはならん人になつた。今となつて失くするくらゐなら、始めから逢はなかつた方がよかつた。お前さんでなくては十分に扱ふとの出来ん仕事を拵へてしまつたのだから、留つて自身でやつてくれるか、今まで爲たことを自分と一しよに持つてつてしまふか、どちらかにしてくれなければならん。若しわたしの思ひやりが足らなかつたのなら……足る筈はないから……以後は力めて其恩を荷ふやうにするから、さうすれば、ますます友誼が深くなるのでわたしには利益だから。あの不祥なシ、リヤ國の事は、もう言はんことにして貰ひたい。シ、リヤと聞くと同時に、あの、今は後悔したと言つてゐる、さうして仲直り

もしたわたしの兄弟王のことを憶ひ出して、何ともいへない心持になる。あの極めて貞淑な妃や子供達が非業に亡くなつたことは、今でも尙生々しい歎きを催させる。……時に、倅フロリゼルには最近には、何時會ひました？ 子供らの不肖なのは、國王たる者の不幸だ、末頼もしいと見極めてから、其子を亡くするのも不幸ではあるが。

カミロ はい、王子にお目にかゝりましてから、もう三日になります。どういふ別のお楽しみがございますやら存じませんが、近來はとかく朝廷からお遠ざかりなされ、従前とはちがひ、お稽古事にもお身が入らんやうにお見上げ申して、心懸りに存じをります。

ボリク わたしもそんな風に思つて、多少注意してゐた。で、忍び目附を使つて、彼れの外出に氣を附けさせた。彼等の報告によると、倅は時折、至極下賤な牧羊者の家から歸つて來ることがあるさうだ。其男は全くの無一物か

カミロ
 ら急に言語道断の大身代となつて、四隣の者を駭かした者だとかいふ噂だ。手前も然ういふ者の噂を聞きました。たぐひ稀なる美人の女を有つてをりますさうで。其娘の評判は、さやうな賤が家から出た噂とは思はれませんが、せんに、廣がつてをります。

ホリク
 それがわたしの聞いた報告の一部分でもある。それが件をそこへ引寄せ、釣らしい。お前さんはわたしと一しよにそこへ往つてくれ。素性を知らさんやうに身を假装して、其牧羊者に會つて、談をして見よう。敵手が卒直な農夫だから、件の往來する仔細が、たやすく聞出されるだらうと思ふ。どうか、さしあつた此用向を手傳ふことにして、シ、リヤへ行くのは止めて下さい。

カミロ
 かしこまりましてございます。

ホリク
 ありがたう、それで安心した！… 服装を變へなけりやならない。

二人とも入る。

第二場 牧羊者の茅屋に近き往還

無頼漢オトリカス乞食のやうな姿をして、唄を歌ひながら出る。

(唄) 水仙が咲き出しや——へい！——へい！
 小娘ッ子谷間で日に向ぼツこり、——
 だんく時候が上等になります。
 お冬の青い面、赤い血でぼか〜。

所行服ア、骸子と淫賣婦のお庇で手に入つたのだ。で、常収入はと言ふと胡麻の灰だ。北海道での叩き合ひや絞罪臺と來ちやアあんまり薬が強過ぎらア。撲たれたり、縊られたりは怖ろしいからなア。そこで、後生の事なんかは、ぐツすりと眠忘れてしまふことに決めてるんだ。…(ふつと一方を見て) や！ 好い獲物！ 好い獲物！

牧羊者の伴何の類りに考へながら出る。

伴

かうつと。 劔羊の毛は、十一疋分で三貫目だ。三貫目は十兩と三分だとする、千五百疋分を刈ることにするだと、幾らになるだか？

オート

(傍白) 絹が外れなけりや掠鳥は俺の有だ。

伴

數取珠が無くらやア俺にや分んねい。かうつと。何を買ふだつけか、此羊毛刈祭の準備に？ 砂糖が三百六十目に、無實乾葡萄が六百目に、米が… 妹め、米を何にするだか？ 父さまが妹を此祭の女主人公役にしたか

ら、妹め、どし〜やらからすだ。花束ばかりでも二十四人分も拵へたい。三人組の唄ひッ子だ、みんな。しかも甚く上手なんだ、けんど大概みんな中聲かバス聲かだ。たつた一人ビューリタンの男が、あの男だけが、角笛に合せて讚美歌うたふだ。…梨饅頭を染める繪具を買はにやなんねえ。それから花肉笠に… 棗椰子だつけか？… うんにや。そりや此書附にやア無いや。… (書附を見て) 肉笠が七つ。生姜が一本か二本。が、こりや貰つて來られら。… 李が四百六十目に、それから乾葡萄がやッばしそれくらゐか。

このうちオートリカスわざと地上に平伏つて苦しさに涙をながら啼く。

オート うん〜！ あゝ、生れて來なけりやよかつた。あゝ、苦しい、あゝ、苦し

伴 (はじめて気が附いて、びつくりして) あアれ!

オト あゝ、助けてくれ、助けてくれ! どうぞ此檻樓を引剝いでくれ! あゝ一思ひに死にたい、死にたい!

伴 あれま、惘然さうに! 引剝ぐどころか、もつとく檻樓ツ子でも可いから。被なけりや不可ねいだに。

オー あゝもし、わたしア此檻樓が破らはしくつてくたまらないのです、管で撲たれた其痛さよりも堪らないのです、管で百萬たびも撲たれたんですけれど。

伴 あれま、惘然さうに! 百萬たびと撲たれちや耐へられぬいよ。

オー わたしア追剝に逢つて、さんざつばら撲たれたんです。金も被物も奪られて、其代りに、こんな檻樓を被せられたんです。

伴 やア! 馬に乗つてゐたかね? 歩いてたかね其奴ア?

オー 歩いてましたよ、はい。

伴 歩いてた奴に相違ねいだ、こんな檻樓被てるだからね。若しか、これ被て馬に乗つてゐたんだら、とえらい働きでもして来た和郎だんべい。... さ、手貸さつし、俺助けてやるだから。さ、手貸さつし。(伴オトリカスを抱起す)。

オー (顔を上げて) あゝ、もしく、どうぞ

ぞやんわりやつて下さい、やんわり!

伴 はれま、かえいさうに!

オー あゝ、もし、どうぞ、そつとやつて下さい、そつと! 肩胛骨が脱れたやうですから。



伴 (やつと立たせて) どうだね! 立てんかね!

此間に、オートリカス手を背後へ廻して、農夫の衣蓋から金を物取る。

オー やんわりやつて下さい。どうぞ、そつとやつて下さい。……ありがたうございしました。お庇で助かりました。

伴 金がないかね? 少しぐれぬなら俺お前さんに呉れてやるべい。

オー どういたしまして。どうぞ決して。こゝから十町足すの處に親類の者がゐますから、そこへ参ります。さうすりや、金でも何でも間に合ひます。金まで戴いちや濟みません。

伴 あんたを刺いだのアどんな奴だつたね?

オー 一玉ころがしを商賣にして歩き廻つてた奴ですよ。あいつは本は王子さまの御家來でしたつけが、あいつのどの美徳が因でだか知りませんが、お

伴 笞を頂戴して、御殿から叩き出されたてことだけは確實です。

あいつの悪徳いふだよ。美徳有つたもんが御殿から叩き出される筈無だからね。御殿ぢやア、どうにかして美徳有つてる者留めときたい思はつゝやるだが、ま、居つかねいさうだね。

オー さやう〜、悪徳といふのでしたよ。わたしはあの野郎をよく知つてゐます。あいつは其後猿舞はしになつてました。それから執達吏ね、それから「放蕩息子」の操りを持ち歩いてゐましたつけが、わたしの地所の在る處から一マイルそこいらの或鍛冶屋の嬖と夫婦になりました。さうして、いろんな良くない職業を取換へ引換へした擧句の果が悪黨の一點張となつたのです。人によつちや、あいつをオートリカスと呼んでまさら。

伴 ひでい奴だ! 盗賊だ、必定盗賊だ。お祭りや市や荒熊責めなんかへ這入り込むのア其野郎だ。

オー その通りですよ。はい、そいつですよ。そいつめが如是な襦袢服を被せやがったのです。

伴 あんな臆病な悪黨野郎は、此ボヘミヤ中に、又と一人ありやしねいだよ。若しかあんたが、威張り返つて、唾ひっかけてやれア、突走ッたゞんべいに。

オー 白状しますが、わたしは意氣地なしなんです。さういふことは全く不得手なんで。奴はそれを知つてゐるんです、はい、たしかに。

伴 もう氣持ア好いかね？
オー 御深切に、……もうツツとようござんす。立つことも、歩くことも出来ません。もうお別れして、親類の家の方へ、そありく歩いて見ようと思ひます。

伴 伴れて往つてあげようかね？

オー どういたしまして。 どういたしまして。

伴 ちや、さやうなら。 俺これから羊毛刈祭の準備に、いろんな薬味買ひに往くだからね。

オー ごきげんようござらつしやりませ！……

農夫の伴入る。

(其後影を見送つて) おい、薬味を買ふにアお前の財布が些と冷ツこすぎるよ。いづれ羊毛刈祭でもお目に掛りませう。まづこれを手始めに、農夫共を羊扱ひにする第二番手に成功しねいやうなら、おれの名を悪黨帳から削つて、善人名簿へ附込んでくれ！

(嘆) とつこい、とつこい、細徑づたひを、

陽氣に、愉快に、石段上りやれ。

陽氣に氣を持ちや、全日も疲れぬ。

抱いで歩いてりや、半里でへこたれ。

歌ひながら入る。

第三場 牧羊者の茅屋

牧羊者の妻に假装した王子フロリセルと女神の假装をして
ぬる牧羊者の養女バーティタと出る。

フロリ (むつまじげに寄り添って、惚々とながめて) 斯ういふ變つた服をお着だと、どこか
らどこまでも新生命を帯んで来るよ。牧羊者の娘なんぞとは見えない。
まるで四月の噴泉の中から覗いてゐる花姫神のやうだよ。此羊毛刈祭

は可愛らしい神さまたちの會合のやうだ、さうしてあなたが其女王なんだ。
バーティ もし、御前さま。わたしなんか、あなたの御法外な御所行をかれこれ申
すのちやありませんけれど、あれ、御免なさいね、御法外なんて申して
済みません！ けども、一國の王子さまともある高い御身分のあなたが、
こんな見すばらしい下賤の者の衣服を被ていらつしやるのに、賤しい女の
わたしの方が、女神さまそつくりに着飾つてゐるなんて！ これが若し
かお祭騒ぎに附きもの、馬鹿アな習慣で、酔つたやうになつた紛れにする
ことでなかつたなら、わたし、其お姿を見ちや羞かしくつてたまらないで
せうよ、又自分を鏡で見たら、氣絶するかも知れませんのよ。
フロリ わたしはまた、あの時、わたしの鷹が逸れて、偶然にお前のお父さんの地所
へ降りたのは、全く神さまのお引合せだと思つて、有りがたく思つてゐる
よ。

バーデ (天を仰いで) ジョーヴ神さま、どうぞさうでございますやうに! ……わたしは、あんまり身分が違ひますから、怖くつてなりません。あなたは偉いお方ですから、心配なんかいふことは御存じないでせう。わたしは、かういふうちも、若しかお父さまが、あなたが偶とこゝへいらしたやうに、偶といらつしやりはすまいかと、身が慄へます。お、運命神さま! お大切な王子さまが、こんなあさましい姿をしていらつしやるのを御覽になつたらお父さまは、どんな顔をなさるでせう? 何とおつしやるでせう? わたし、こんな可笑しい借衣をしてゐて、お父さまが怖い目をして御覽になつたら、如何しませう?

フロリ
 なアに、只おもしろいばかりだよ、心配おしでない。神さま御自身だつて、戀の爲には、獸類の姿をなすつたことなんかあつたんだ。ジューターさんは野牛になつて、もうく〜とお鳴きになつたといふよ。海の神さまのネ

プチューンさんは羊におなりになり、又燃え立つ火の服を被してゐるアポローさんは、ちようどわたしのやうに、見すばらしい農夫に御變形なすつた。しかも其神さまたちの變形の目的物は、わたしのそれほどに稀な美人ぢやなかつた、又其戀だつても、わたしのやうに清淨ぢやなかつた。わたしは決して情慾をして廉恥を乗越さしめるやうなことはほしくない、淫らかな心に眞實心を壓せさせるやうなことは決して爲ない。

バーデ
 お、だつても、幾ら然う定めていらしつても、王さまの御威勢で不可いとおつしやれば、…きつとさうおつしやるにちがひない、…其時には、どうしたつて、あなたがお心をお變へになるか、わたしが命を捨てるか、どちらかにせねばなりませんもの。

とバーディタと妻れて泣く。

フロリ
 慰めてねえ、バーディタそんな途方もないことを考へて、折角の面白い祭

をつまらなくしておしまひでないよ。ねえ、お聴きよ、わたしはお前と一しよになるか、で無けりや王子ではなくなつてしまふ積りだよ。お前と一しよになれなけりや、もう自分が、自分の者でも何の者でもなくなつちまふんだから。此心は決して渝らないよ、運命めが否だと言つたつても。よ、陽氣におなり。何とかして紛れて、そんな考は押殺しておしまひ。もう直にお客達が来る。ね、陽氣におしよ、今日こそ、かねぐ二人で誓言してゐた其婚禮の日が来たのかと思ふやうに。

パーデ

お、運命神さま、どうぞ仕合せが好うございますやうに！

フロリ

(向うを見て) あ、客人たちが来た。愉快さうにして、款待をする準備をなさい。頬が眞赤になるほど浮かれて遊ばうよ。

今は大物持となつてゐる牧羊者の親戚、其伴(進化方)村の娘、モブサとドオカス、及び其他の村の男女多勢を伴れて出る。

いづれも、羊毛刈祭だといふので、多少盛装をしてゐる。其後に續いてボリクシニーズ王とカミローとが、全く別人のやうに假装して出る。

観望

(パーティタを見て) これさ、女、どうしたものだ！ 阿母が生きてた時分にア、祭の日にア、彼女一人で、食物も仕入れりや飲む物も仕入れる、料理番もすりや、女主人公役も、家来役もしたもんだ。衆客の接待もすりや衆客の給仕もして、番が来りや、唄も踊もやつたもんだ。今食卓の向うの端にゐるかと思ふと、すぐに又そツちの一人と組んで踊る。其骨折で、面から火が出る、するとそれを消すために、一人残さず敵手にして酒を飲む。それだのにおぬしはお客のやうに引込んでばかり。些も女主人公のやうぢやない。さ、此(とボリクシニーズとカミローへ科をして) 始めてござつたお客人にお款待

をしてくん。な、さうすれば、お互ひにぐッと知り合ひになれるだから。さ、そんな顔をししないで、今日の祝の女主人公らしくやつてくれ、おぬしは女主人公なんだから。さア、祭へ来さした人達へ「ようござらつしやつた！」と言ふだく、宅の稼業冥利に。

パーテ (ホリクシニーズに、初心らしく) もし、ようおいでなさい。わたしは、お父さんの吩咐で、今日の女主人公役を勤めます。 (カミローに) ようおいでなさいました。 (村の娘に向つて) ドオカスさん、そのその花を下さいな。 (草花を受取りて、ホリクシニーズとカミローとに) お老人のお方さんがた、貴下がたには、迷迭香と芸香を。この花とこの花とは、冬一ばい色をも香をも保つてあります。お二人さんのお天福草、お記念草です。ようおいでなさいました! (つくく見とれて) うつくしい牧羊の娘さん、老年のわたしたちに冬の花をくれられるとは、似つこらしい。

パーテ あなた、ことしも既う大ぶ開けましたけれど、まだ夏が果てもせず、寒い冬が生れもしないので、季節の一等綺麗な花といへば、石竹か繡ジリ一かでござんすけれど、あゝいふ麗花は、わたしらの花畑には生えてません。さうしてそれを、わたしは、一莖だつて、欲しいとは思ひません。

ホリク え? 娘さん、何故あゝいふ花をそんなに粗略にするんだね?

パーテ でもわたし、あの、紅と白との斑色に咲くのは、人の手で以て自然天然の作用に擬へさせて見たのだといひますもの。

ホリク さうかも知れん。が、如何やつて見たとて、それが自然の法に適はなければ、到底自然以上に出ることは出来ん筈だ。だから、自然の作用に擬へたとお前さんが謂ふ其人工は、つまり、天工でもある、やつぱり自然がさせるのだ。ね、そら、あの極粗末な木の幹へ、すつと上等な挿枝をば嫁入らせ、即ち立派な血統の芽で以て、下賤な樹木を懷妊させることがありませ

う。あれは自然を補ふ、いや、寧ろ作り變る術だといつてもよいのだが、あれがやつぱり自然力のさせることだ。

バーデ え、さうです。

ホリク ちやア、お前さんのこの花畑にも、ジリーを澤山に咲かせるがよい。花だなんぞとお呼びでない。

バーデ わたしは、あんなものを、一莖だつて植ようとして、土を掘るのは否です。

それと同じに、(とフロリセルを見返つて)わたし、紅や白粉を塗けてゐて、それで綺麗だから、胤を残さしたい、と此方に言つて貰ひたくはないのでござんす。(村の男女に向つて)さ、これはあなた、ちのよ。香の高いラエンダ、薄荷草、香ひ草、マヨラナ草。太陽と一しよに寝て、また太陽と一しよに涙ぐんで目を覺す金盞花。これは悉皆眞夏の花ですから、中年のお人、たちへお獻げするのが例でせう。ようおいでなさいました。

カミロ (つくづく見とれて)わたしがお前さんに飼はれてゐる羊であつたら、草を喰ふのをば止めて、只詠めてばかりゐさうだ。

バーデ あら、まア！ それだと、あなたは、尙と瘦せてよ、一月頃の強い風だとあなたの體なんか吹貫しツちまひましてよ。(村の娘らの中の、最も標致のよいのに向つて)さ、いつち綺麗な人、わたしはあなたの若いのに似合ふやうな、何か、春の花が欲しかつたのよ。(別の娘に向つて)それから、あなたのもね、又別の娘に)あなたのもね、あなた、ちは、これからがやつと娘盛りなのだから。(天を仰いで)お、プロサーピナさん、貴女が吃驚して地下神さまの車からお落しなされたあの花が欲しいことよ！ あの水仙は、燕子がまだ來得ない頃から、綺麗に咲き出して、三月の風を迷はせる。それから、堇の花、艶は淡いけれど、ジュノーさんの目蓋よりも、ギナスさんの息よりも懐しいあの堇の花。それから、顔色のわるい櫻草、日の神さまの

御全盛をも見ない中に、嫁入も能為ないで、死んでしまふ櫻草、娘さんたちに有りうちの悪い病で。それから、九輪草とお冠り草。百合のいろんな種類、鳶尾も入れて！ あゝ、あゝいふ花がないのよ、あなたたちに花環を製へてあげたいのだけれど、…さうして此大切のお人にたとん、花を撒いてあげたいのだけれど。

とフロリセルへ科をする。

フロリ え、死骸のやうにするの？

バーデ いゝえ、(と飾へ寄つて)好きな人同志臥轉んで遊ぶによい土堤のやうによ、死骸のやうではなくよ。よしんば、死骸に似たつても、埋められるのではなく、生きてゝ、わたしが抱いてゝよ。…さ、さ、花をお取りなさいね。…あら、わたし、つい、いつうか、あの復活祭のお祭禮で見た昔の牧羊娘たちの真似をしてゐたわ。きつと、此被物がわたしを妙な氣にならせるのだわ。

フロリ

(其顔をほれと見て)あんたがすれば、何でも尙とよくなる。あんたが言ふのだと、いつまでもそれを言つて、貰ひたくなる。あんたが歌ふと、物を貰ふにも、賣るにも、施しをするにも、お祈禱をするにも、それでやつて貰ひたいと思ふ。用事を吩咐けるにだつて、歌でやつて貰ひたいんです。さうしてあんたが踊ると、あゝ、あんたが海の浪だといふがなアと思ふんです、只踊つてばかりゐて貰ひたいからです。しよつちう、動いてばかりゐて、外には何にもしないであつて貰ひたいからです。あんたのすることは何でもかんでも無類ですから、みんな非常に立派ですから。仕草中の女王なんです、どれも〜。

バーデ まあ、ドッキリーズさん、あなたの讚め方は、あんまり偉過ぎるわ。あなたは若い、正直な若い衆さんだと、はつきり分つてればこそだけれど、さうでない、ドッキリーズさん、わたし、あなたを輕薄な方と思つて用心しま

してよ。

フロリ

わたしにそんな気がないと同じに、あなたも決してそんな氣づかひをする必要はないでせうよ。それはさうと、さ、踊りませうよ。パーディタさん、さア、手を。斯うして、番ひ離れのタートル鳩のやうにね。

パーデ

わたし然う誓言してよ。

二人手を組み合せて舞じげに一方へ歩いて行く。

ボリク

(パーディタの後妻を詠めてカミローに) 全く田舎に稀な、實に可憐な村娘だ。あの娘のする事なり様子なりには、下賤な境界の者とは思へない身分以上の一種の高尙さがある。

カミロ

あの若い男が何か申したら、顔を櫻色に致しました。實に、あの娘は凝乳や乳精を取る女中での女王でございます。

此うち例の道化方の伴とんきよな聲で歌合をかける。

伴

さア、く、囃子だく！

モブサとドオカスとは此伴の情緒としての競争者なので、始終伴の飾を離れないでゐる。

ドオカ

(皮肉) どうしたつて、かうしたつて、モブサさんがあなたのお妻君よ。だ

けどね、大蒜が要つてよ、あの人の口の臭いのを消すにア！

モブサ

(口をとんがらせて) はい、おかたじけ、御深切だわよ！

伴

(二人を制して) 黙つてく。行儀よく爲るだに、けふは。さア、く、囃子を

はじめらだ、囃子を！

これにて音楽を奏しはじめる。と男女の牧羊者らの踊がはじまる。

ボリク

(牧羊の親爺に) 老爺さん、あなたの娘さんと一しよに踊つてゐるあの端麗な若い衆は、ありや何者ですな？



観童 みんなにドリクリーズといふ名で呼ばれてます。立派な牧場有つてるいつて、自慢してますだが、わし眞實だんべい思つてをりますだよ。正直さうだからね。わしの娘が好きで爲様がねい言ひますだが、わしもさうらしいと思つてます。水に映つてるおツ月さんだつて、彼男がわしの女の目玉アじつと見守つてる程にや居据つてゐな

かんべいからね。が、ぶちまけて言ふと、どっちの方が、一キツス分だけでも餘計に惚れてるだか分りませぬだよ。

ボリク

女さんの踊ぶりは、大變にしとやかだ。

観童

何をしてもしとやかにしますだ、黙つてるが當然の親の口で言ひますだけれど。若しかあのドリクリーズが女を手に入れ、ア、思ひもかけねい幸運に有りますよ、あの男。

下男一人出る。

下男

(牧羊者親子に) お、旦那さん、今ね、戶外へ行商が来たやがね、ま、ちよつくらあの唄ぶりに聞いて見さつしやい、もう二度と太鼓や堅笛ちやア踊らつしやるめいによ。囊笛なんかちやア逆も踊られッこアなかんべい。其行商アあんたちが錢算へるよりも早く唄うたふだ、まるで小唄喰つてた人のやうに吐き出すだからね。それ聞いてると、だれだつて、生え附いち

まつたやうになるだよ。

伴

ちやうど可いとこへ来たやね。こゝへ通してくんろ。おらア小唄大好
きだからの、悲しいことを面白く作へて歌つたり、愉快な事を情ねい聲で
以て歌ふんだからね。

下男

男向きのも、女子向きのも、いろんな唄知つてますだ。町の小間物屋の
莫大小だつて、あんなに、どの顧客の手にも適切はいくめい。娘、子にア
可憐しい色戀の話聞かせるだが、奇態なことにア、聞きづれいこと言はね
いだよ。「デイルドー！」だの「フェトデン！」だの「女郎を投げろ！女郎を
擲れ！」だの言ふ面白い捨難子してね。で、若しか口のわりい無頼漢が、
何か悪戯爲べい思つて、穢い口呷きかけようと爲るとね、奴、娘子に教へ
て「あれさ、お止しよ、そんなことお止し！」と斯う歌はせてね、其奴を黙ら
せツちまふだ、賤蔑げるやうに爲せるだ。「あれさ、お止しよ、そんなこと

お止し！」ツて歌つてね。

ボリク

そりや中々器用な男らしい。

伴

そいつア、ふんとに、えら面白いかんべい和郎だね。何か劣等品でねい物
オ持つてるかね？

下男

先づ、リボン持つてますだ、虹の有ツたけの色の。それから引掛け鈕、ホへ
ミヤ中の辯護士さん達が、一じよくに持込まれて、ぶッ揃つて、學問で以
て捌かつしやるちふ、あのそれ、論點だらだつても、あの鈕の數程はなかつ
べい。それから平打紐だの、毛絲紐だの、綿リンネルだの、本リンネルだ
の、それをば神さまの名、並べるやうに唄で以て言ひ立てるだ。だから、長
襦袢だつて、袖口だつて、其襦袢の胸ンとこの模様だつて、みんな天人のや
うに聞えるだよ。

伴

こゝへ伴れて来てくんろ。唄歌はせながらなう。

バーデ (下男に) ねえ、さういつとくれよ、いやらしいことを歌はないやうにね。

下男 入る。

伴 (マーティンに) あ、いふ商人は、あんたが思つてるよりア、存外面白いこと知つてるもんだに。

バーデ 兄さん、わたしも今然うかと思ひかけてゐてよ。

此うちオートリカス、前の場とは全く別人と見える程度に行商の扮装をして、口輪に見えてゐる通り、一切の商品を頭から吊下した臺に掛け違へて、下の廣告唄を歌ひながら出る。

(唄)

雪より白いが上等リンネル、

鴉もそこのけ、眞黒縮緬、

ダマスク薔薇かよ、薫物入手袋、

假面のいろく、全面用、半面用、

黒硝子珠の胸かざり、

琥珀細工の頸かざり、

御婦人がたのお香水、

金糸の帽子とお胸かざりは

可愛いお方へ御進物、

頭の先から踵の先まで

無いものなしたよ、御娘さん達、

留針、縫針、銅鐵の髪附け、

さア、買つたり、買つたりく。

お若い衆たち、買つたりく。

買ななきやお娘がおいく泣きます。

買つたり〜！ さア〜。買つたり〜！

伴

(半分傍白的に) おれモブサに惚れてさへわなけれア、金使はせられるやうなことねいだけんど、爲様がねい、リボンと手袋ぐれの買はんけりやなるめい。

モブサ

(あまへて) よう、お祭までにアきつと買つて貰ふ約束だったによ。今だつてまだ役に立つわよ。

ドオカ

其他にもまだ約束ぶつたことがあるだらう、覺えないお言ひなら、虚言者だによ。

モブサ

あんたに約束したもんは、あの人とうに悉皆済した筈だわ。餘計な物まで與げたんぢやなくつて？ それを今更となつて野面で返せて？

伴

(二人を制して) 娘子仲間にア禮儀も作法もねえだか！ 處柄も辯別へねい

で、面に腰巻を被るやうなことを爲るだか？ これそんな内密事ア就寝する時

分か、牛乳絞る時分か、竈の前かで喋舌るがい、客人たちの前でべちやべ

ちや吐いちやなんねいだよ。あの人が(とボリクシニースに思入して)ちやう

ど耳語してるだから幸ひだけんど。舌を疊み込んで、もう黙つてるだ。

モブサ

もう言はない。さ、あんた、レースと蒸物入手袋を買つてくれる言つたわ。

伴

おれ、途中で以て、だまくらかされて、金みんな失くしッちまつたこと話したでねいかね？

オート

(空とぼけて) 成程、世間にや随分人だまくらかす悪い奴がゐますからね。だから用心しなくちやなりませんや。

伴

(オートリカスが無意味さうな顔をするのを見て) なアに、心配しねいでもい、こゝにやそんな者アゐねいだから。

オート へい、だらうとは思つてますがね、わっしは如是な、いろんな有價の物を持つてますからね。

伴 何持つてるだね？ 小唄は？

モブサ (伴にめまへて) よう、どれか買つとくんないね。わたい版行になつてる唄が一等好きなの。版行になる位だから、きつと眞實だからさ。

オート こゝに一つ物凄いな話があります、高利貸の女儀さんが、一度期に、財布を二十も産んで、大病になつたて話です。それから其内儀さんが、蟻の頭や蝦蟇をすたく切にして、煮附にして、それを食べたがつたといふ話です。

モブサ ほんたうなの？

オート ほんたうですとも、たつた一月前の事です。

ドオカ あらいやだ、高利貸なんかの許へは嫁ぎたくないわ。

オート お辯さんて其産婆さんの名前まで分つてます。それからまた五六人、

正直なお内儀さんたちが立會つてます。虚談なんか賣廻るもんですか？

モブサ (伴に) それを買つとくんないね。

伴 さ、それを、ま、取除けといて。他の先へ見せてくんろ。今にいろんな物買ふだから。

オート こゝにまだ人魚の話のがあります。四月のちようど八十度目の水曜日、四萬尋もある海の底から、濱へ浮上つて来て、酷い娘さんの心得のため、此唄を歌つたんだいひます。もとは人間だつたんだが、深切な男の言ふことを聴かなかつた報いで、冷い魚にされちやつたんだといひます。

ドオカ それもほんとなの？

オート 此判決にア判事さんが五人、證人の數は、此荷箱へ入り切らん位のです。

伴 (感心して) そいつも除けといてくんろ。……もつと他のを。

オート (又別のを取り出して) こいつア可笑くて、陽氣で、しかも好い唄です。

モブサ (伴に) 陽氣な、をかしいのも羨らか欲しいわよ。

オート これアね、すばらしくをかくって、陽氣な唄でさ。「男一人にお娘が二人」
ッて節でね。西の方へ行きや、これを歌はない娘、ツ子はありやしません
や。大流行でさ、ほんとに。

モブサ わたしらも其唄知つて、よ。お前さんが男の役ッしてくれ、ア歌ふわ。
三人で以て歌ふんだわね。

ドオカ あの節をおぼえてから、もう一月になるわねえ。

オート 出来るともね、男の役ア。歌ふのは商賣でさ。……さ、いゝかね?

(唄)

オート 歸つてくんなろよ、往かねばならない、卿らに知らせちやなんねい處へ。

ドオカ どツちへ往くだか?

モブサ どツちへ? どツちへ?

ドオカ どツちへ?

モブサ 隠し事せぬ約束だアによ。

ドオカ 俺も一しよに往かせてくんなろよ。

モブサ 倉へ往くのか? 磨粉場アへか?

ドオカ どツちへ往くことも、悪性男め!

オート どツちエも往かねい。

モブサ 往かねい?

ドオカ 往かねい?

オート あ、往かねい。

ドオカ 好いたと言たのが定ならば、

モブサ 夫婦と言たのが定ならば、

言はんせ、どツちへ?

どツちへ往くだか、どツちへハ?

伴 (歌ひ了ると同時に) 後で今に、自分たちばかりかして歌ふべい。(まだ歌ひたさうな顔をしてゐる娘共を制めて) 爺さまと旦那がたア眞面目くさつた話してるだから、邪魔になんねいやうに爲べい。(オートリカスに) おい、其荷物かついで、俺に尾いて來う。娘子たち、おれ二人ながらに買つてやるだよ。…行商一等好いのを賣つてくんろよ。娘子たち、さ、尾いて來う。

オオカスとモブサを伴れて入る。

オート (其後影を見送つて、にやりとして、傍白) 随分のお金目になりませうぜ。

次の唄を歌ひながら尾いて入る。

(唄)

買はんせく、眞田の打紐、
笹縁を買はんせ、肩掛用だよ。

絹布に絹糸、お頭のお飾り、
何でも上等、新規の流行だ。
さアく、ござんせ、小間物々々々!
お金は調法、萬家の通寶、
何でもお金で買はれる、買はれる!

オートリカスが入ると、下男又出る。

下男 (親爺に) 旦那さん、車力さんが三人、羊飼さんが三人、牛飼さんが三人、豚飼さんが三人、それがみんな毛むくぢやらの人間になつてね、おらたちは半獣半人神だ言つてね、娘子らが、うぬらが入らねいもんだで、ありや減茶踊だ言つてる踊をどるべい言つて、やつて來ましただ、球投ほっきや知んねいやうな上品な人にだつても、随分面白かんべいからツてね。
観音 いけねい! 駄目だ。下卑たこたア今までにもう多過ぎたくれぬだ。

：(ボリクシニーズらに) あんたがた、囃困らッしやつたらう。

ボリク

あんたこそ折角餘興を持つて来た人達を困らせてゐなさんだ。どうか其三人づゝの四組踊といふのを見せて下さい。

下男

其中の一組ア王さまの前で踊つたことある言つて、自慢してますだよ。其中の一等下手な男だつて、一間ぐれぬは躑躅上りますだに。

観

ま、しやべくるのは止める。…此お人達のお好みだから、そいつらを伴れて来てくれる。早く、すぐにだ。

下男

すぐ戶外に待つてますだ。

下男入る。

これより半獸半人の群に扮したる農夫ら多勢入來りて、滑稽踊をはじめぬ。其間親爺とボリクシニーズらとは始終何か小聲で話をしながら踊を觀てぬ。踊が段落になると、

ボリクシニーズは話を止める。

ボリク

お、親爺さん！ この事は、又いづれ他日。…(カミローに傍白的に) 少々行

過ぎた位ならう？ もう歸つた方が可い。正直な爺さんだから、ずん

／＼話してくれた。…(フロリセルに) どうだな、若い衆さん！ お前さんは

何か思ひつめてゐなさんかあるので、自分の樂みはまるで忘れッちま

つておいでのやうだね。わたしも、年が若くてお前さん同様戀女があつ

た頃には、無暗とつまらん物を買つて来ては其女に與つたものだ。行商

の持つてる限りの絹物を顛覆して、探して、それを降るやうに買つて

やつたものだ。お前さんは何にも買はないで、あの行商を歸してしまひ

ましたね。若し情婦が誤解をして、お前さんを客だとか、情が無いとか言

つた時分には、答にお困りだらう、女を不機嫌にしたくないといふ氣が少

しでもあるなら。

フロリ

お老年さん、彼女はあんなつまらん物は、些も欲しがらないのです。彼女が欲しがらる物は、わたしの此胸に収めて、錠が下してあるんです。もつとも、それはもう夙に遣つたんですけれど、まだ渡しはしないのです。……(パーティタに) お、此お老年の前で、……どうやら戀の經驗がおありのやうだから……ほんとの心をお前に打明けるから、聽いて下さい！ わたしは

ボリク

お前の手を取りますよ、此、鳩の柔毛のやうな、柔かな、眞白な、エシオビヤ人の齒のやうな、北風で二度も篩ひ分けられた雪のやうな此手を。
(一寸二人から離れてカミローに) あの上へ何を言ひ出すか？……(手をキツスしてゐるのを見て) 只さへ綺麗な手を、彼男は尙綺麗にと洗つてでもゐるやうだ。……(フロリセルに) つい、すまなかつた。……そこで、お前さんの告白といふのを聽きませう。

フロリ

聽いて下さい、さうして證人にもなつて下さい。

ボリク

(カミローへ科をして) 此仁にもり。

フロリ

其方は勿論、あらゆる人間を、天をも、地をも、一切萬物をも證人として、公言します、たとひわたしは權勢の最も赫々たる國王であるが爲に、此上もない身分であつたとして、又わたしは、曾て女に秋波を轉ぜしめた無類の美少年であつたとしても、又人間の未だ曾て有つてゐなかつたやうな力や知識を有つてゐたとしても、わたしはそんなものは、彼女の愛が伴はない以上、決して貴いとは思はないでせう。若し有つてれば、そんな物は悉皆彼女の爲に使つちまふでせう。それを用ふるのも、捨てるのも、一へに彼女の爲にするでせう。

ボリク

正常な申込みだね。

カミロ

十分堅實な愛情だと思はれますな。

親爺

(パーティタに) だが、女、あんたア其通りの事をあの方に言ふかね？



バーデ

わたしは逆もあんな風には
言へません。けれども上手
にいひたいとも思ひません。
わたし、自分の心を型にして、
あの方も決して虚言はおつ
しやらないと定めてをりま
す。

観

ちや、手を取合つて。約束
するだ。…此知らないお人
達が其證人だ。ボリクシニーズら
にわしは女を此若いのに遣
ることにします、さうして、

持參金はあの男の財産と同じ高にしますだ。

フロリ おゝ！ 女さんの人格だけ貰へば澤山です。今に或人が亡くなれば、わ
たしは貴老の想像にも及ばないやうな物持になるのです。今は只それだ
け言つておく。さア、此證人の人達の前で、契約して下さい。

観 さ、手を貸しなさい。女、あんなの手も。

と二人を握手させようとする。ボリクシニーズ止めて、

ボリク 一寸、お若いのも、ま、お待ちなさい、一寸。…お前さん、お父さんがありま
すかい？

フロリ あります。それが如何しました？

ボリク お父さんは此事を承知してゐますか？

フロリ いゝえ、知りもしなければ、知る筈もありません。

ボリク わたしは、息子さんの婚禮には、お父さんは當然正客となつて、其席の飾